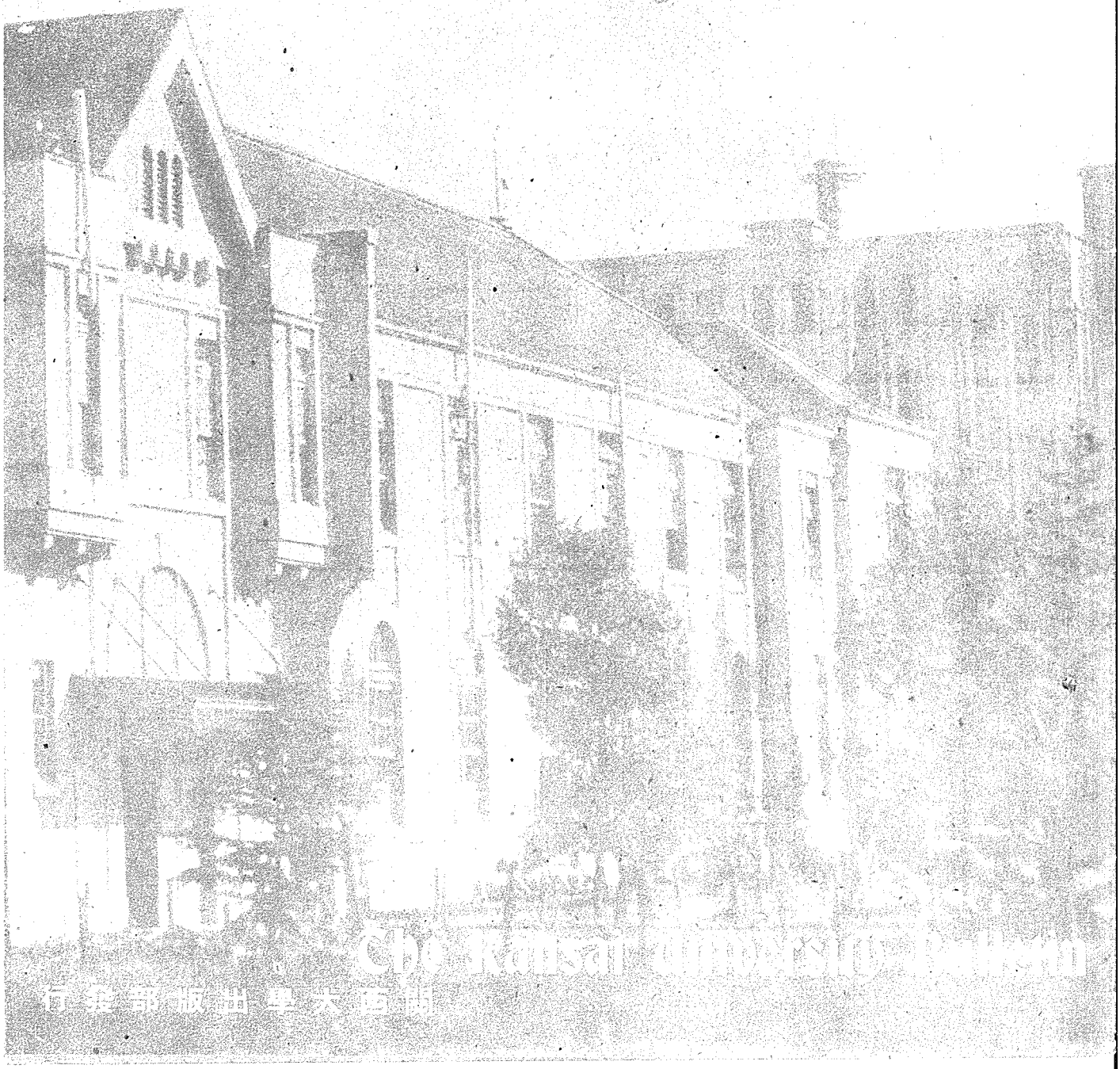
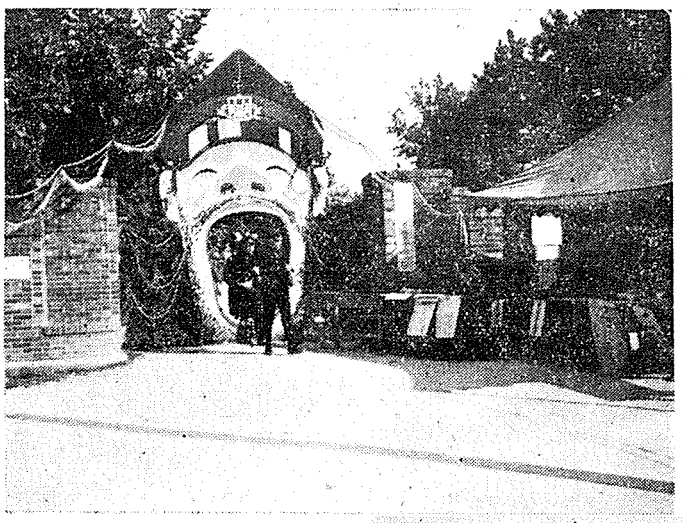
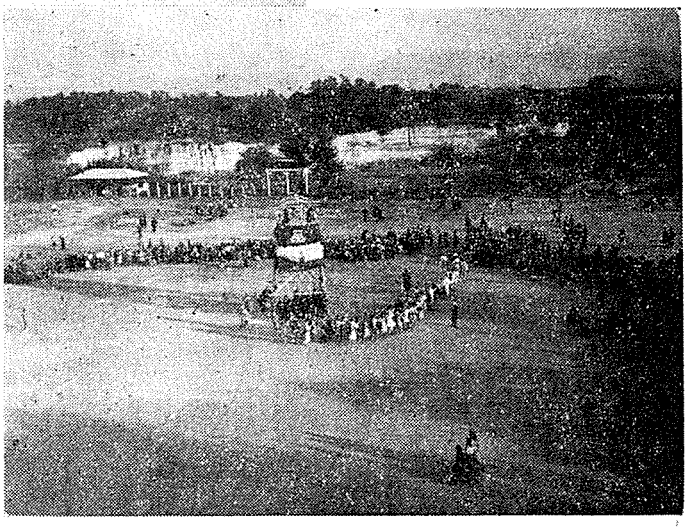
哥倫大學報

第二百九十號



行政部發行 學生會出版





大學祭風景

Studia adolescentiam alunt,
Senectutem delectant.
—Cicero.—

目次

現在フランスの學生生活……ジャック・シャゼール（一）
五井蘭洲の源氏學……吉永登（六）
家事審判所より見たる戀愛……大阪谷公雄（八）
「大學祭の今昔」を語る……座談會……（一四）
「學生時代の思ひ出」……各名士……（一六）

學園

大學祭……シャーゼル氏講演……ツッサン氏講演……教育後援會……特別議義……（二二）

校友

常議員會……關大計理士會……校友會大阪支部總會……（三二）

斷想

兒島惟謙の裁判……靜湖生（三〇）

現在フランスの學生生活

佛國大使館付
文化書記官
大學教授適格者
ジャック・シャゼール

皆さん

私はまづ本日こゝに皆さまの前で話すようにお招き下さつた諸先生方にお禮を申さなければなりません。私はこの光榮にいたく感激するのでありますが、しかもこの光榮たるや決して私一個人に宛てられたものではなく、私自身も數年前までその生活を共にし、本日その生活を皆さんにお話せんとしてゐますフランス學生に對して與へられたものと考へるのであります。したがつて皆さまも私を學生とし、同僚としてお迎へ下さることをお願ひいたします。そしてたとへこのお話の中に私個人の經驗をしばしば引合ひに出しますのも、それはこの經驗が今日のフランスの青年の一經驗であるからであります。

さてこれから述べる敍述に於ておそらく皆さまも自分自身の姿をそこに見出されるであらうやうな幾多の特徴を容易に發見されることを信じておりますし、またさう希望さへ致します。それといふのは少くとも經濟的領域に於て我がフランスを甚だしく苦しめ、また彼ら學生が最先きに參加したこの戰爭が終局したばかりの今日に於ては、多くの點においてフランスの學生も、皆さま方御自身が生活しておられると相似た物質的精神的諸條件に置かれてゐるからであります。どうぞこの類似が惱みに在る皆さま方にとつて慰めともなり、力添へともならんことを願ふのであります。とりわけフランスの經驗のこの教訓が、その長所も短所もともどもに、皆さま方御自身の努力に於て多少とも役立つことを希ふのであります。

戰後のフランスの大學生活はまづその複雜さと困難さとによつて特徴づけられます。學生、といふこの言葉は今日ではかつて見ざるほど種々雜多な內容を包含するものであります。こゝ三年以來、學生數が著しく增加しましたことも——實際たゞ一つのパリの大學區に對しても五萬人以上の學生がゐるのでありますが——それは正規に高等教育を受ける年齡に達したものと同時に、戰爭によつてその研究を中斷せられてゐた多くの青年たちが再び研究にとりかゝらなければならなかつたからであります。もちろん終戰以後多くの特別試驗が復員學徒、政治流刑者のために行はれて幾分か入學難を緩和はいたしました。しかしそれでもやはり今日に於ては學生の數は以前よりも增加してゐるのであります。

この現象はカルチエ＝ラタンに於て奇妙なる、また畵のやうな一樣相を呈せしめてゐるのであります、卽ちそこに於ては三十才の「元戰鬪員」が中等學校を出たばかりの喘の黃色い青年たちと肩を並べており、かつての軍服の光榮ある名殘りである色褪せた詰襟が、肱に穴のあいたインクの汚染のついた灰色の通學服や、多少とも形のくづれたジャケットと入りまじつてゐるのを見るのであります。しかしかくも年齡が違ひ、運不運の差の甚だしい學生間に於て、ある種の反目が伴ふのも無理からぬことであります。それに殊に社會に對する門戶を開放する大學や專門學校の卒業試驗の競爭の激烈さとなつてあらはれるのであります。未だ

かつて就職者と受け容れられる者との比率がかくも甚だしいことはありませんでした。しかもこの不均衡がそのまゝ學問全體の上にのしかゝり學問をして戰前よりも遙かに眞劍な、莊重なものとさへなすのであります。といつても大學の喜びは消えたのではありません。しかし「甘美なる生活」は消滅したのであります。

學問的競爭のみならず、物質的生活さへもが甚だしく苛酷になりました現在、これを如何となし得ませうか。中產階級の貧困化といふ一般的現象――この中產階級が日本に於けるよりもはるかに數多かつたフランスに於てはこの現象は一しほ顯著なのでありますが――この階級の貧困化といふことは、ひいては大多數の學生が少くとも全面的には家庭より學資を得られないといふ事實を招來いたしました。それでもパリに家と食物とを有するものはまだ幸福なのです。他のもの、地方から上京したもの、しかもこれが大多數なのでありますが、彼らは宿舍を得るためには實に天文學的價格を要するのであります。首府の南郊にありまする萬國學生會館にたまたま住居を求め得た幸運なるものも、たゞ一室のために毎月千フランから千八百フランを支拂はねばなりません。（フランの購買力が圓のそれと目下のところほゞ同じであることを御注意下さい）普通の下宿屋にいたつては暖房裝置もない、時には殆んど家具さへもない屋根裏の部屋をも二千フラン乃至二千五百フランで貸すことすらいとひ、日割りで一ケ月三四千フランを稼ぎださうとするのであります。したがつて宿所を確保するためには實に巧妙なる、しばしば實に不便なる方法をも用ひざるを得ません。もとの兵舍も徵發せられました。防空の避難所も學校の寮に、學校の食堂に、勉强室に改造せられました。しかし幸ひにも最も普通なる方法は、その居住者の家族數が新法規が許す以上に多い室數を有する所謂餘裕住宅を多少とも好意的に借りることであります。一方これによつて所有者の方も僅かの負擔で徵發を免れるといふわけであります。

食事の値段もこれに相應してゐます。昔ならば五六フランで食事のできた食堂に於て今ではほんたうに食事をしようと思ふならば百フランから百五十フランを支拂はねばなりません。もちろん、大學の簡易食堂、割引値段の學生食堂も增加しました。また田舍からの小包が日々の獻立の不充分さを幾分か緩和もいたしました。しかしそれでも食生活は決して樂觀すべき狀態ではありません。

書物の値段についてはこゝでは殆んど觸れますまい。それが日本に於てどれ位であるかは皆さまも御存知です。フランスに於ても同樣であります。

しかも以上のことが學生の平均年齡がかくの如く昇り一方反對の理由によつて結婚年齡が低下した現在、世帶持ちの數が甚だしく增加しました。試驗の準備をし、それに合格する心遣ひの上に、乳の世話をし、子供の面倒を見なければならない若い男女にとつては、勉學するのになんといふ惡條件でありませうか。彼らの多くのものにとつては、今日勉强を續けることは眞に英雄的行爲なのであります。

かゝる事態の結果は由々敷いものがあります。しかしそのことごとくが不幸なものではありません、むしろ反對でさへあります。

第一の結果は、學究的勞作に金儲けの仕事を併行させなければならないといふことであります。政府が學資を出してくれる學校に行けなかつたもの、家庭からの仕送りを期待出來ないものにとつては、しかもこれらが大多數なのでありまするが、彼らが食ふために、また食はせるために働かなければなりません。醫學の學生は病院に於て朝の課業をすますや、午後の一部を注射や、痲醉や無料診斷所に捧げます。法律の學生は講義に沒頭する前に公證人や、代訴人のもとで書類書きに時間を費し、文科の學生は飜譯や個人教授や、あるひは最も派手なものは新聞關係の仕事や、あるひは祕書に自分の餘暇を捧げるのであります。

かゝる制度に於てほんたうの學問が失ふところは想像に難くありません。それはただただ試驗の日のための大慌ての、鵜呑みのプリントの勉强にあらずしては、肝心な書物を讀み落す結果を來らせます。かつて人

ゞが糞勉強（バンヨターシュ）と呼んだもの、即ち中等課程を卒業するに際しての強度の、偏狭な勉強ぶりが今日の學生の通則となりました。正規の教養、即ち利害を念頭におかざる教養は否應なしに點取り主義の犠牲にされました。そしてたとへある學生が無理をしてでも學科目に直接的に要求されてゐない二三の書物を讀むといふ贅澤を見出し得たとしましても彼には常に個人的な反省、夢、想像にふける餘暇がないのであります。以前の學生ならばこの餘暇を持ち、今日に於ても一部の特權者はそれを享樂してゐるのでありますが、この一見して怠惰と見えるこの餘暇こそ却つて眞に教養ある精神を生み出すのに必要缺くべからざるものであります。

生活のかくも嚴しき第二の結果、いはゞその必然的結果は、金儲けになる仕事への傾向とでもいふべきでせう。それによつて我々の青春をむしばんだ悲慘を一擧に拂ひ去り、そのつぐなひを求め得られるからであります。そしてその反對にある種の自由職業、殊に教授職、司法官などの如き美德の行使を必要とする職業に對しての不安であります。しかしこの弊害はフランスに限つたことではありますまい。また幸ひにもこれは救ふべからざる弊害でもありません。

その代りと申しますか、生活のかゝる嚴しさはそれを克服する大多數のものにとつては學問や教養自體より、はるかに貴重な特質を與へるのであります、即ち性格の強さと判斷の正確さがこれであります。戰前の學生が大人の歳になるまで考へるに及ばなかつた人生の苦勞を年若くして而も眞正面にぶつかつてゆくといふこの生活はなんといふよい學校でありませうか。個性を鍛へるのになんといふ素晴しい學校でありませうか。家族の面倒を見、日々の糧を求めながら孜々として勉學にいそしむといふこのたゞ一つの事實だけでも、戰前のフランスの青年がなし得なかつた強烈な意志の證據であります。現在の學生生活の眞劍さ、莊重さが、よし狹い意味に於ける教養に缺くるところありとしても、この魂の陶冶といふ點に於て償ひ得てあまりあるのであります。

現在の學生氣質の最も大きな特徴の一つは公けの教育に對しての無關心、いな輕蔑といふことであります。私が教へられましたやうに、この無關心が日本に於ても同樣に著しいものであるとしましたならば、このことについていささか附言しますことをお許しいたゞきたい、といふのはそれこそ現代の青年の最も深奥なる獨自性の一つを表明してゐるものでありますから。

戰爭の嚴しき生活を味ひ、身を賭してもあらゆる惡條件下に自己の判斷を守りつゞけて來た多くの青年たちが判斷の權利といふものを體得したのは極めて自然であります。しかもこれらの青年が一たび學校に歸るや、はるかに年若い、はるかに從順な生徒たちのために考案せられた講義內容にたやすく服從し得ないのもまた自然であります。尠くともフランスに於ては學生たちは先生の教へよりも獨自的勞作、獨學的研究を好みます。もつともこれは一個人の研究とは限らず、同好の志が集つた共同研究をも指すのでありますが。（住居の不足、書籍の高價、彼らの收入の乏しさが共同研究に向はせるのであります。）

もちろん、こゝに於てもまた學問、教養はそれを利用するものの經驗の不足といふことによつて損失をきたします。しかしそれらの失ふところは性格が償つてくれるのであります。しかもこの差は償ひ得て餘りあるものであります。何とならば學問や教養はかゝる場合、まだ子供である生徒に無理强ひに押しつけられた規則の結果ではなくして、既に成熟した大人によつて自由に選擇された結果だからであります。人々はもはや兩親や、先生や、社會の體面が要求するから勉强するのではなく、己れ自身がその効果と價値とを認めるが故に行ふのであります。即ち人々は自發的にそれを行ふのであります。そしてこれによつて人々は自己自身を形成しつゝあるのであります。

も一つ、しかもこれは大學生活の現在の狀況から來たる最後の、且つ最も重要なる結果なのでありますが、かくも物質的な不安が入りまじつてゐるこの學的勞作さへも、それ自體にては今日のフランスの學生の全興味を滿し得ないのであります。彼らの個性が世間との接觸によつて

豊かになりましただけ、彼は自己の學問をその正しき位置に位置せしめ、更に廣い、更に豊かな世界と關聯せしめてそれを眺めることを學んだのであります。

世界戰爭の災禍を經驗し、幾多の國民、幾多の文明を危ふからしめた物質的、精神的葛藤に參加してゐながら、心の底に消え得ざる痕跡をなんら留めざるなかつたものは一人もないのであります。少くもフランスに於て現代の學生を戰前の學生と最も異らしめるものは、即ち近代社會が相爭つてゐる政治的、經濟的、社會的、哲學的問題さへをも彼らが心の底に藏してゐるといふことであります。象牙の塔にたてこもつてひたすら己が研究のみを、たとへそれが文學にしろ、法律、醫術、自然科學にしろ、いはゞ利己主義的に追ひ求め、國家あるひは國際間の出來事をあたかも實驗室内の研究者が屋外の天氣を氣にする程度にしか氣にもかけず、己が研究にのみ專心するといふ時代は既に過ぎました。窓は否應なしに開かれた。其處に吹込む風はあなたの同意を求めません。それはあなたの上を吹きすさび、それに注意を拂ふのは當然であります。

外界に對するこの興味の最も一般的なる形は、現下のあらゆる大問題に對する甚だしい好奇心であります。しかもそれは上すべりの好奇心ではなく、あらゆる事物に於てその本質を見きはめんとする好奇心なのであります。教育の改革、社會の安寧、憲法――もちろんこれらはその一例にすぎないのですが――に關する論爭はいろんな所でその反響を見出したのであります、たとへば終戰以來いまだ無かつたほどの發達を示した大學新聞をはじめとし、學生間の討論會に於ても、あるひはビヤホールの一隅や、リュクサンブール公園のマロニエの樹影に於ける友人間の會話に於ても著しい反響を產み出したのであります。しかもこの好奇心たるや、單にフランスの問題にとどまりません。戰爭以來、學生の視野は世界の隅々にまでひろがりました。外國から、東から、西から、アメリカから、ポーランドから、印度支那から、赤道アフリカから歸つてくる先輩や教授たちの話を彼らは渴望し、如何に國々が行動してゐるか、如何に國民たちが生活してゐるか、また全世界の青年の問題、不安、希望は何ぞやを知りたがつております。私が今日皆さまと致しまするこのお話も、もし私がそれをパリに於てあなた方御自身の生活としてフランスの學生に話しましたならば、必ずや大成功を收めうるのであります。

しかもこの好奇心は單に結論にとゞまつてはゐません。大きなる飛躍がフランスの青年をフランスの外へ驅り立てるのであります。といつてそれは外國へといふよりはむしろ――もちろん既に外國に敎へに出掛けたいと希望してゐる若い敎授たちも數多くあるのですが――それ以上にフランスの海外領域へ驅り立てるのであります。なんとならば其處に於ては出鄕といふ欲望や、發見の欲求や、また半ば戰爭の產物である冒險の渴望も、仕事の飢渴さへも滿たし得られ、しかもこれらの欲求がフランスを見棄てたといふ懸念、不安なしに滿足せしめられるからであります。かくして「海外フランス學院」（もとの殖民地學校）はますます今日その權威を增加し、「海外フランス開拓協會」といふ特別なる一協會がこの傾向に適應し、それを指導するために設立されたのであります。

しかしフランスに留つてゐるものに對しても、四圍の緊迫せる狀況は、なんらかの立脚點を求めることを餘儀なくいたします。カルチエ＝ラタンに於て政治的議論は以前にも增して頻繁となりました。しかし今日の新しい特徵は、近代の大問題はもはや個人的な尺度によつては解決され得ず、むしろ團體的尺度によらざるを得ないといふ深い自覺であります。學生たちが所謂黨派にあきたらず、運動の枠に直ちに身を投ずるといふ一般的傾向もこれに由來するのであります。たしかにフランスの大政黨はことごとく大學にその代表者を有してゐます。ことに共產黨、これはこゝに於ても亦よそに於けると同樣に最も活動的でありまして、「フランス共和青年聯盟」を支持してゐます。また特に敎授と學生目あての「フランス復興大學」といふ共同團體もこれに附隨してゐます。社會主義者は共產黨の右に位置せんと努め、トロツキー主義に媚を呈してゐます。最後にド・ゴール將軍の「フランス國民聯合」とならんで「フ

ランス青年聯合」が生れました、そして彼らは社會主義者たちをマルキシズムの古い假面をかぶつたものと非難してゐます。かくの如く現在のフランス大學生の政治地圖を描くことは不可能ではありますが、右側に小數の自由主義者、左側に同じく少數の、しかし活動的なる共産主義者、そして中央には本質的には社會主義者ではないが、社會主義者化せんとしてゐる大多數が位するとでも言ふべきでありませうか。

しかしかゝる青年の生活の最も新しい要素を求めなければならないとすれば、それは政治的方面に於てではなくして、むしろ共産主義が滿足せしめ得ない宗教的渇望と、マルクス的思想とが相會した處より生れてくる新運動でありまして、その共通の特徴としていづれも宗教的色彩教具へてゐるのであります。カトリックのJ・E・C、新教のキリストを聯盟、イスラエル協會、ボーイ・スカウト運動の各分派などがそれでありまして、その悉くの諸運動が青年の眼には次のやうな價値を持つてゐると映じてゐるのであります、即ち一方では必要缺くべからざる瞑想を個人に與へ、團體には精神的、一致を與へるといふ價値と、他方では現世に於ける生活の規準と、世の苦難に對する積極的な貢献をもたらすといふ價値であります。それがこれらの運動の盛んになる理由なのであります。

結論と致しまして、いままで述べ來つたこれらいろいろな考察から今日のフランスの生活を最もよく特徴づけてゐると思はれます全般的な觀察を引き出すといたしますれば、私は先づ次のやうに申しませう、即ち學生生活全體が物質的生活の惡條件によつて支配せられており、他方では現代社會の鬪爭、不和、悲慘が心に生ぜしむるところの不安によつて支配せられてゐるといふことであります、即ち現在流行してゐる實存主義――といつてこれは大學生間に於ては巷間もてはやされてゐるほどの流行をきたしてゐるのではありませんが――がその一部分は說明してゐる不安なのであります。この物質的困難、この智的、精神的不安、それらは既に皆さんも經驗されてゐるでありませう。それらは扱ひ方によつては最も惡い結果か、最も善い結果を生む性質のものであります。私は決してフランスの青年のなかに於て今日すべてがうまくいつてゐるとは申しません。むしろかゝる生活の條件がもたらしまする多くの不完全や、危險をも指摘したのであります。しかし全體に於て青年が置かれてゐる社會狀態の嚴しさが却つて彼らにとつて現在の利益ともなり、あらゆる現實に對して開かれた精神を養ひ、より幸福な國土、よりよき世界を建設するに一役演じようとする激しい欲求となつて表はれてゐることを固く信じてゐます。今日のフランスの學生は既に大人であります。しかも他の誰よりも人類のつとめに邁進すべく身構へてゐる大人なのであります。

それは殆んど總ての國に於て同じことだと皆さまは言はれるでせう。もちろんさうです。しかしこの講演を終るに際しましてフランスの青年學徒の最も特異的な點を探さなければならないとしますれば、それは勉强の面よりも、彼らの娯樂の面によりよく表はれてゐるのであります。到るところフランスに於ては演劇同好會、素人芝居、ダンス、音樂、博物館見物といふ會が催されており、それらは單に物を識るといふ悅びよりも、むしろ良い趣味を擴めんとしてゐるのであります。ラヂオクラブは音樂の悅びと良い放送を選ぶことを教へ、映畫クラブは良いフイルムと惡いフイルムとを區別することを教へるのであります。かうした傾向はすべて特に美術、文學、思想の方に向つてゐます。實にヒューマニズムがいまや青年の力でフランスに再興しつゝあるのであります。このヒューマニズムがなければ、科學には明日われわれが生きてゆけない世界を形成するといふ危險があり、この科學の害に對する最良の解毒劑こそかゝるヒューマニズムであると信じますし、フランスが、特にフランスの青年が科學とヒューマニズムといふこの二つの訓育の綜合を實現することによつて、この哀れな世界に必ずや何かを貢献することを信じて疑はないのであります。

（完）

五井蘭洲の源氏學

文學部教授　吉永登

昨年、燒け殘つた大阪の古本屋で買ひ求めた「源語詁」「源語提要」の二書が意外にも五井蘭洲の自筆であるらしいことが明かになつたのはこの上もない喜びであつた。さうした緣で昨夏この二書に關する所見を靜安學社の例會で發表したのであるが、これはその時の草稿に多少の手を加へたものである。

一、蘭洲の閱歷

五井蘭洲は名を純禎といつて、四書屋加助で名を知られた五井持軒の次男である。父の持軒が學問のために家産を治めなかつたので、少年の頃から隨分苦勞をしてゐる。時には父の負擔を輕くするために尼崎の親戚に預けられ、その轉住に從つて信濃の國へ出かけた事もある。しかしさうした流離に際しても學問に對する熱意だけは持ちつゞけてゐたらしい。

二十才の頃、漸く親の元に落着くことが出來たが、生活の乏しい親の故に極度に窮迫した日常であつた。しかも彼には孝養の限りをつくした父のほか師授があることを聞かないので、この頃が家學收得の期でもあつたらう。

享保十一年中井氏等が大阪尼崎坊に懷德堂を設けるに及んで學主三宅石庵を助けることになつたが、辭望はむしろ他を凌いでゐたといはれてゐる。

翌十二年江戸に遊び、居る事數年召されて津輕侯に仕へたが、本邦最北の地、全く文化に見離されたところだけに學問への理解などあらう筈もなく、教化兆ありと云はれるものゝ失意の九ヶ年であつた。やがて病に托し官を辭して故郷大阪に歸つたが時に年四十三、元文四年のことである。爾來寶暦十二年、六十六才で世を終るまで諸侯の聘を退けて町人學者として終始した。

彼が久しぶりで歸つた頃の懷德堂は、學主三宅石庵既になく、代つた中井甃庵又老いて、堂勢衰微の極にあつた。ために推されて再び講壇に立つことになつたが、依然として助教名義であつたのも彼の人格がしのばれ、甃庵の死後も遂に學主にならうとはしなかつたのは床しい。

懷德堂の學風に轉機をもたらしたのはこの頃からで、在來の經書本位が緩和せられ、非公式ではあるが、文學も講ぜられることになつたのである。時勢に敏なる英斷であつて、彼の指導力の幅の廣さが察せられる。

彼の高い識見を傳へる逸話は多く、當時盛名のあつた荻生徂徠と相見ない事を幸としたのもその一つである。甃庵が二兒の教育を托したのもさればこそと思はれるが、果してその附托に背かず遂に竹山、履軒の二大儒に仕立て上げたのである。後世この二人の盛名にかくれて、師蘭洲の名の顯はれないのはすこぶる遺憾で、懷德堂並びに大阪府立圖書館收藏の遺著に見ても、彼の眞價は今後に俟つものが多い。

蘭洲の漢學については他に人があらうと思はれるので、ここには觸れない。彼の餘技とも見られる國學についても在來知られてゐた「勢語通」「萬葉集詁」「源語詁」「源語提要」「古今通」の外、府立圖書館收藏の遺著には

神代卷口決、中臣祓紀聞附三種大祓、詠歌大概、古今序紀聞、古語拾遺講義、舊事本紀紀聞附古事記紀聞、神代卷講義

などが見出される。彼の父持軒は契沖に師事したことがあるので、彼の國學のよつて來るところもうかがはれないでもない。

二、源語詁

家藏「源語詁」は三卷あつて、源氏物語中の難語を注釋したもので、その分類はかなり複雜になつてゐる。最初に

一、天文地理時候居所宮室鬼神　二、虛詞　三、人倫支体草木禽獸虫魚　四、服食器材　五、人事部

の五部門に分けてゐる。今日から見ればなさずもがなの分類であるが、當時盛んに用ひられてゐた節用集の形式によつたものと思はれ、案外便利であつたものかもしれない。次ぎに各部門の中で、桐壺、帚木と卷の順序を追ひ、その各の卷の中で、いろはの順に語彙が配列せられてゐる。例へば、桐壺の卷にある「納殿」といふ語は、卷一の「天文地理……」の部の「きりつぼ」の見出しの最初に

おさめとの　禁中のものを入るゝところなり內藏寮とはことなり……

とある如きである。所々「補」の見出しで語彙が補はれてゐるのは、この書が增補本であることを物語つてゐる。

蘭洲のこの勞作には參考した文獻のあつた事は云ふまでもない。さきにも觸れた父持軒の師であつた關係からか契沖の說を引くところが少くない。例へば

ぼうぞく　……契沖は放俗と註せり

などと「契沖は」「契說」「契云」の語によつて引用してゐる。これらは何れも契沖の源語拾遺によつたものであらう。しかし最も多いと思はれるものは「註」として引かれてゐるもので、例へば

てくるまのせんじ　註に輿に輪をかけて手して引車をいふといへり……

もゝしき　註百官の座をしくゆゑに禁中を百敷といふ……

の如きこれである。これらは前者の一條兼良の「源氏和祕抄」後者が四辻善成の「河海抄」と一致するのであるが、蘭洲は、一々原典に目を通したものではなく、恐らく集成本ともいふべき季吟の「湖月抄」でも參考したものと思はれる。中には、まれに

はかまき　註に皇子のは御はかまきといひ　皇女は御もきといふといへり……

の「註」のやうなものもあつて、これは何によつたものであるかは知ることは出來ない。明かに彼の意見と見るべきものは「愚案」とか、引用の前說を否定して「されど」と云つて私見を述べてゐる所などであらう。しかし全體を通じて大部分を占める書き放しの語釋中にも彼の考へがあることは云ふまでもない。

家藏本は前述のやうに、蘭洲自筆本と目すべきものであるが、他に寫本としては、國語と國文學特輯「源氏物語號」に掲載せられてゐる植松安氏の調査によると阿波文庫の三卷本と、泰山文庫舊藏の四卷本との二部がある。前者は恐らく足代弘訓の聚集になるものと思はれる。

ところでこゝに注意すべきは泰山文庫舊藏本が四卷になつてゐることで、これは武笠正雄氏の源氏物語書史にも四卷とあつて簡單に誤寫としてしりぞけられないやうに見受けられる。しかし武笠氏は源語詁の原本は見て居られないらしく、それは後に觸れる源語梯の解題に「體裁內容全く源語詁に同じ」と云つて居られるのを見ても知られる。案外泰山文庫舊藏本の册數をそのまゝ寫して居られるのではなからうか。西村天囚博士の「懷德堂考」にも三卷と見え、家藏本又缺本〻も考へられないので、四卷本がかりに實在するとしても恐らく卷册の分け方の相違によるものと考へるのである。

この源語詁は蘭洲生前には出版せられずに死後二十餘年を經て、蘭洲の關係者には無斷で上梓せられてゐる。それが源語梯で、體裁も故意に改めたひどいもので、これを知つた弟子の中井竹山も流石憤慨したらしい。しかし結局は商人に泣付かれて、再板後は竹山の跋文を附けることにして許可したのであるが、この跋文は竹山の爲人も知られるので大意だけ取ることにしよう。

無名氏が近頃源語梯をあらはしたが、見れば蘭洲先生の源語詁である。早速本屋を呼びつけて叱りつけたが、本屋もあやまることであり、考へて見れば內容も多少增減があり體裁も變へてはゐるが、先生の眞意を損ずるほどの事でない。これでも世を益することに於ては事足りるので默認することにしよう。しかし今後の出版にはこの跋文を必ずつけさせることにする。

と云ふのであり。從つてこの跋文のあるのが再板である。

扨てこの不德義漢は誰れであつたらうか。序文に「淡路國犬上川のほとりなかつかさ」とあるのが、果して實在の人であるかも疑はしく、まして校訂者の「浪華黃備園主人」とあるのは恐らく變名であらう。今更詮索も無用と思はれるが、享保以後大阪出版書籍目錄によると

源語梯　本文丁數一百五十九丁
作者　關　慶次郎（城州伏見）
板元　鹽谷　平助（南久太郎町六丁目）
出願　安永九年二月十四日
許可　安永九年二月二十八日

とあつて、悪いことは出來ないものである。べそをかいた本屋の親父の名まで知られるから恐ろしい。この人と蘭洲との關係は知る由もない。

三、源語提要

この書は西村天囚博士も未見の書で、勿論諸家の目錄にも見當らない。內容は源氏物語の拔萃で、支那に文抄といつて、左傳、國語のすぐれたところを拔いた例があるからそれに倣つて童幼婦女の讀み物に供したのであるといつてゐる。勢語通內篇と同じ基準で選ばれたもので儒者的臭味が強い。三卷あるが、卷一の冒頭九枚にわたる「源氏物語をよむ凡例」が蘭洲の源語觀を示すもので、眼につくところどころを拾つてみることにしよう。

先づ式部が物語制作の主意については、

一、藤原氏の專橫に對して皇子を權威あらしめようとしたこと。これは、源氏、

夕霧、黛の繁榮の樣子でしられる。

二、貴族子弟のおごりを止めるようにしたこと。これは夕霧を六位の學生から出發させたことがそれである。

三、男女の好色をいましめる。源氏が朧月夜内侍をおかしたむくいによつて須磨に流されたが、しかも自分の罪をさとらず、やはよろづ神もあはれと思ふらむおかせるつみのそれとなければ、とよんだ途端大雷雨になつたことや、源氏の罪の子である冷泉帝には子孫なく朱雀帝の後がさかえたことにも作者の深い用意のほどが見受けられる。

四、婦人の好色をいましめる。源氏に通じた女はすべて尼になつてゐる。又夕顔の如き頭中將が隱れ家の前を通るのを見過ごして源氏に通じたために悲慘な死に方をしてゐる。

などと論じてゐる。式部が物語制作に際して時にさうした意識を持つたことは認められても、それを物語全般の主旨とする見方は當つてゐない。そこには儒者としての彼の面目が露呈してゐる。

しかし流石は源語を味讀してゐるらしく、源語に古來褒貶の意の存することを云ふが、褒貶は讀む人の心にあるので、作者はたゞありのまゝに書いたにすぎないといつてゐる如きである。この點彼が前述の物語の主意論と如何に調和させようとしてゐたかは明かでない。

此の提要中最も注目すべきは傳授思想に對する批判で、彼は所謂三ケの大事を頭から否定し、それは活計のために設けられたものであるとさへ極言してゐる。拘束のないところに學問の進歩がある譯で、町人學者の言葉らしい。

最後に一つ、受領が富んでゐるやうに書いてゐることは意味があらうと指摘してゐるところである。望月のかけたるはしのないと云つた道長の榮華の絶頂にも既に民心は藤氏を離れ地方官、地方豪族の擡頭が目立つて來て居つたらしい。それが寫實の書であるだけに源語には當然描かれてゐる譯で、蘭洲の眞意が何であつたかは捕捉し難いが、見逃さずに指摘してゐるのは流石である。

豫定の枚數もつきたので不本意ながら以上を以て擱筆する。卒讀の間、讀み誤りもあらうと思ふのであるが萬事御ゆるしを願ふ次第である。

（完）

想斷 兒島惟謙の裁判

靜湖生

明治六年の大阪新聞に兒島惟謙が大阪裁判所司法少判事として下した判決が載つてゐる。

兒島惟謙といへば司法權の獨立を主張し大津事件で護法の神と名を殘した人、奇しくも本學創立の時大阪控訴院長の職に在り、元本學理事武田宣英博士等の第一回卒業式のことを報じた明治二十二年九月十八日の大阪朝日新聞には「同日は榎本文部大臣も兒島控訴院長西村府知事及大臣隨行の人々と共に其席に列し」と報じてゐる。

明治六年と明治二十二年の新聞を比べてみても今昔の感をそゝる。今手許にある明治六年の大阪新聞は隔日發行で一部一錢八厘、その新聞の物價日表にある「攝津米三四十七錢」は一石の値段だらうから、當時の物價からすればかなり高價である。大きさは菊版和紙に木製活字の印刷である。

當時は「公聞」又は「掲示」として掲載されたものであるが、參考までに兒島惟謙少判事の判決を二三紹介してみよう。

（一）

豐島郡櫻塚村
宮本泰藏

其方儀神社鎭坐地所等ヲ舊ノ如ク致トテ其方發意同僚申談シ多人數屯集スルト僞リ區長ヘ迫ル科不應爲律宥恕ヲ以テ贖罪金五兩一分申付ル

（二）

播州揖西郡龍野
小間物屋伊三郎娘
脫籍 小菊

其方儀窃盜ノ科ニ依リ大阪府ニ於テ處刑ヲ受ル身分不愼伊勢ト申合刄物ヲ携ヘ往來人ヲ威シ其外一ケ所ニテ金錢品物等賊ニ計ヘ金二十七兩餘奪取ル科持兇器强盜律ニ依リ斬罪申付ル

明治六年三月十二日

大阪裁判所司法少判事兒島惟謙

これらの判決の基礎となつてゐる當時の法制について解說する餘裕はないが右は刑事々件の公告のようなものである。これから約三年兒島少判事は明治九年に名古屋裁判所長二十四年には大審院長に補せられた。

大學特別講義

家事審判所より見たる戀愛（講演要旨）

大阪家事審判所長判事
本學講師
法學博士
大阪谷公雄

家事審判所に於いて取扱つている事件の大部分は離婚に關する事件であつて、次に正當な婚姻に基づかない子供、即從來私生兒と云はれたもの、に關する問題が殺到しつゝある現狀である。かゝる事件を取扱つている處には當然男女間の戀愛問題が起つて來る。私はこれを文學者、倫理學者の立場よりこれを見るのではなく、法律上より社會的に見て如何なる意味をもつかと云ふ事を今日とりあげる事にする。戀愛は如何なる人にも起り得る事實である。――傳記によれば、ヘレンケラー女史に於ても戀愛を感じたと云はれてゐる。――然らばこの人生に於て必然的な事實である戀愛は時代の變遷と共に如何に取扱はれたか、これを法律的な意味より考へるならば、從來吾々の社會生活に於いては賤しめられ、むしろ罪惡視し、不義と云ふ考へで取扱つていた。即戀愛する事自身が惡いとなし、結婚前の男女がそれに近づく事自體が惡いとなしていた。私の學生時代には若い異性と歩く事さへも變な目で見られていたのであつて、今日より見れば全く悲慘な生活であつたと云へる。法律家より見た戀愛はこれを罪惡視せずにこれを放任的な立場で見てゆくと云ふ事は從來見られなかつたのであるが、新しく生れた家事審判所に於ては機能上これを別な視點から取扱うこととなつた。

「法律は家庭に入らず」と云ふ諺の示すように家庭の事は圓滿なる性質と社會的な常識で處すべきと考へられるに拘らず、從來の裁判手續では社會の情勢を加味して處する事は出來なかつたが、家事審判所では單に法律的な解釋のみによらず社會的な情勢と照合してこれを調停することができる機能を持つている。

例へば家事審判所に持ち出された離婚の場合には如何なる理由によるものであるかを當事者だけでなく親、兄弟からも事情を聞き從來のやうに單に法律的に見るのでなく、あらゆる面より之を見てゆくのである。從て又戀愛に關しても一概に罪惡視せずこれは吾々の人生に於ける大きな生活部面であると見て出來る限り尊重し人倫の道に副ふべく之を善導してゆくのである。親の反對を押し切つて結婚した相續人に對する親の訴に對して家事審判所は兩親に對しては結婚を認めさせ、その代りに子供に對しては親の財産はあきらめさせた例がある。

そもそも從來の戀愛は何故罪惡視されていたか、その理由として次の二つが擧げられる。（一）儒教の影響（二）家長權の增大による處が大きい。嫁と云ふものは親が定めるものであり親が認めない嫁は息子のものとして認められないとした。かゝる二つの見方から結婚と戀愛は吾國では從來は全然別個なものと考へられていた。このことは家事審判所に現れた離婚事件から實證せられることに興味の深いことである。即ち、離婚事件を調べて見るとその時機は二つに分れる。（一）ごく短期間の場合（二）十年及至十數年の場合、ごく短期間の場合の原因は大體に於て見合結婚でなされた夫婦に非常に多いが、その理由は漠然として正當だと思はれる理由は少しもない。唯虫が好かぬとか、復員後敗戰の氣分を癒さんが爲に結婚したが性格が合はぬとか云ふやうな理由である。これは相當の知識

人に於てもかゝる例はあるのである。これは日本人の結婚形式が戀愛によつて結ばれるものであると云ふ事なしに二つを別々に考へ本人達が結婚前に充分な諒解を得ていなかつた爲である。即戀愛と云ふものを結婚と切り離して考へる處にかゝる誤りがあるのである。

又、兩親との關係に於て破れる場合もある。結婚後夫婦間は非常に和合したが兩親との關係が悪く息子が親に反抗し親を別居させてくれと申立てた。實際の親子でありながら親の缺點を暴くと云ふ醜い現象が起つている。かゝる場合妻と如何なる苦難をも戰つてゆくと云ふ男の氣力がなく、隨つて親の言ふが儘に離婚する場合が多い。然乍らあくまで親に反對しても妻を守ると云ふ事實もあるが、かかる事例は甚だ少く、大部分は親の言うままに離婚するのである。そして家事審判所に於ては双方が嫌でないと云ふ事が判れば親をよんで語り極力解決するように努力しているのである。新憲法の下結婚は兩性の理解によつてなされる樣に定められたのであるが、尙舊態然たる狀態であり、本人達が果して如何に理解しているかは疑問である。これは見合結婚が反省される今日、それと同時に男女の交際を盛にし、より良く自己に合ふ人を見出さねばならぬ。戀愛に基づかない結婚の大部分が離婚の原因となつているやうな今日注意すべき問題である。

しからば戀愛結婚に於ては絶對に離婚はあり得ないかと云ふと必ずしもさうではない。これは或教師と女學生との事件であるが、二人は戀愛により結婚したのであるが男の方は結婚後現實生活は二人の戀愛だけではたへられないと感じた。尙結婚するとそれまでの感情が拔けてしまひ女は男の生活能力がないから別れると云ふ。かゝる事實より見れば戀愛だけで結婚は成立しないと云ふ事が實證せられ、双方の社會的條件の整つた中で行はれなければならないと云ふ事が證明されるのである。

幸福なる結婚生活を續けるためには現實をよく考へて見る必要があり戀愛は唯結婚に至る道程とだけ考へるべきである。舊來の如き戀愛觀は悪いとは云へ戀愛至上主義はむしろ危險だと思はれるのである。この事は新憲法下にその解釋を誤解する事なき樣若い人々はよく慎むべきである。

尙十年以上の結婚生活の後に於ける離婚はその大部分は倦怠期の到來によるものである。これについて考へるべき事は男尊女卑の時代に於ては男の貞操問題は法律的に又社會的にあまり問題にされなかつたという事實である。それ程日本の男性の貞操觀は稀薄であつた。中年の夫婦の離婚の大部分の理由は夫の貞操問題であり最初は嫌でなかつたが遂に破れると云ふ結果となつてゐる。日本人の結婚は戀愛によつて結ばれてもその現實の生活は破綻であり本來の戀愛による結婚生活の性質と全く逆な結果となつているのである。現在日本の結婚生活は不自然である。それは結婚前は戀愛は戀愛として尊重するがこれを結婚と結びつけず戀愛と結婚を別個のものと考へている。

日本では古くから結婚は神の意志によつて結ばれると云ふ宗教的な考へが全然なく、從て結婚した以上あくまでこれを持續するという考へに乏しい。外國に於ては「キリスト教」的考へ方から結婚とは神の結ばれたものだとなし人間が結ばれる爲には個人相互の愛情を尊重したのである。故に戀愛は尊重されねばならずそして結婚は戀愛により結ばれねばならないが、又そこには人格的な圓滿さがなければ幸福な結婚生活は望めない。

幸福なる結婚生活をなすためには男女相互の人格の結合より外になく先づ人格を磨かねばならない。地位や能力や經濟的なものをのみ考へて戀愛をし結婚した處で人格的なものがなかつたならば決して幸福なる家庭生活はあり得ないのである。

この點特に現在の若い人々のよく考へねばならぬ處である。（終）

戀愛わ理想的なもので、結婚わ現實的なものだ、
これを取り違へる人は屹度罰を受ける。
―ゲーテ―

學園

新制大學第一回大學祭

碧空高く澄み渡る十月二十三、二十四日の兩日、新制大學第一回大學祭はカレッヂライフの意氣と感激とをこめて華々しく擧行された、大學祭を行うこと十九回、常に若く常に新しい大學を謳歌する。千陵に咲く菊花と競うて……。

兩日共グラウンドでわ各種運動競技が若人の意氣を示し、種々なデコレーションわ豫科學舍を埋め、學部及豫科玄關前にわいろ取々の模擬店が客を呼ぶ。

二十六日午前十時岩崎學長の挨拶により繰り展げられた大學祭の青春圖繪

× × ×

各種運動競技

第一日目にわ驛傳競走、軟式野球、ラグビー、サッカー決勝、三段跳、棒高跳が行われ、第二日目には各種トラックに、ラグビー、アメリカン、フットボール等若人の意氣をグランド一杯に漂せた

「デコレーション」

中にわ世相を諷刺せるもので占められ「我等が目指すは眞理探求だ!!」との學生らしい悲願や五百年後の日本考古展等ウイットとユーモアとをカクテルにし、又一方でわ手相、結婚相談所等も賑う。

美術展

美術部主催で行われ特別作品として次の四氏作品あり、學部豫科學生の作品八〇點が美を競う。

鳥海青兒（本學大商卒）仲尾敬一郎（獨立美術作家）石井淳一（專門部商卒）福島四郎（法學部教授）

寫眞展

寫眞部主催で行われ岩宮英氏の「嵐山展景」の特別出展があり、大北弘君（學二）の銀波」が目立つてゐた

山岳展

山岳部主催で各種山岳寫眞及登山用具等を展覽し山岳への關心を唆る。

政治展

政治研究會主催で一般えの政治認識を行い好評を拍した

法律相談所

大學祭恒例の法律相談所は知名先輩辯護士を交えて法學部學生によりてあらゆる法律相談に應じた。

模擬店

豫科前廣場及學部前に於て左記の學友會各部が模擬店を開き觀覽者の足を留める。

高等學校	ア式蹴球部	山岳部
厚生部	三重縣人會	辯論部
拳闘部	ボート部	寫眞部
ヨット部	二部應援團	舊學三年

尚大學祭を記念して左の催し物が行はれた

全關西新制高校レスリング大會	於 尚志館
學内卓球大會	於 尚志館
學内辯論大會	於 豫科講堂
尺八大演奏會	於 豫科講堂
ダンスパーティ	於 天六學舍

× × ×

兩日共櫻花も咲くと云ふ暖い秋日和に惠まれて、觀覽の客足も繁く實に數萬を數え一日のカレッヂライフを滿喫する。二十四日の名物おどりの頃より行事わクライマックスに達し、いつまでも而も限りなく讃へたい青春に盡きせぬ名殘りを惜みつゝ、記念すべき新制大學第一回大學祭の幕を閉づ。

ジャック・シヤゼール氏講演

十一月九日（火）佛國大使館文化書記官、大學教授適格者ジャック・シヤゼール氏を招き、千里山豫科講堂に於て左記演題に依り特別講演會を開催、氏は戰後佛國に於ける學生々活の樣相を說いて滿堂の聽講學生に多大の感銘を與えた。

一、演題　現在佛國に於ける學生々活

（通譯　三木教授）

尚、講演要旨は別項の通りである。

フランソワ・ツッサソ氏講演

十一月二十五日（木）神戸佛國領事、法學博士フランソワ、ツッサン氏を招き千里山豫科講堂に於て左記演題に依り特別講演會を開催氏の造詣深い巧みな劇科白の朗讀に滿堂を魅了した。

一、演題　ラシーヌの戯曲の朗讀

アントロマック・プリタニキュウス

（通譯　三木教授）

尚、講演要旨は次號掲載の豫定

教育後援會の活動

教育後援會わ創設以來設立趣旨の線に沿つて大學に對する側面的援助と學生の福祉增進の爲あらゆる部面に亘つて專心活躍中であるが八月以降も引續いて會を重ねること八回、其の間學生との懇談會も數次行い、厚生會館建設補助や大學祭えの援助等積極的に後援の實を擧げて居る。

前に議案として實施計畫中であつた學內ベンチの設置及大學前屋根建築の促進運動に努力して學生に利する所多大である。

尙現在左記計畫中である。

一、尙志館の改造並に運動部部室建設計畫着々進行中

二、學生文庫（假稱）新設して一般雜誌、參考圖書の購入費として金拾萬圓也を圖書課に委託

特別講義に瀧川教授、勝本博士招聘

藤原龍太氏奬學資金による

先般本學校友、藤原龍太氏より學內にて學生の爲有意義なる特別講義を實施し、她學の補助とされたい旨の申出あり、本學では同氏の好意に深謝すると共に、之に應うべく左記の通り特別講演及講義を實施した。

十月二日（土）於天六講堂

一、講師　大阪家事審判所長判事　本學講師　法學博士　大阪谷公雄氏

一、演題　家事審判所より見たる戀愛

十一月五日（金）於豫科講堂

一、講師　京都大學法學部長　教授　瀧川　幸辰氏

一、演題　犯罪と社會

十一月十六日（火）於豫科講堂

一、講師　東北大學法學博士　勝本　正晃氏

一、演題　インフレーション下の債權關係

十一月十八日（木）於豫科講堂

勝本正晃博士前回講義を續講

十一月二十五日（木）於豫科講堂

一、講師　勝本正晃博士

一、演題　文藝と法律

尙勝本正晃博士の嚴父勝本勘三郎博士は、本學の興正寺及福島時代に刑法を擔當講義をせられて居た碩學である。（瀧川教授及勝本博士の講演要旨は兩氏の御承諾を得て次號學報に掲載の豫定です）

ブランデン氏講演來春の豫定

去る五月二十日東大講師E・ブランデン氏を招いて英文學に關する特別講演を實施する豫定であつたのを恰も電車ストの爲中止となつたが、其の後同氏より宮島理事長の許へ丁重なる書簡を寄せられ、來春早々來學の上、二三回連續して得意の講義をせられる筈。

藤澤章次郎講師

本學名譽教授に

文學部（中國文學）講師藤澤章次郎氏は昭和二十三年十一月二十四日附を以て本學名譽教授に推された。

尙同氏は黃坡と號し嚴父南岳氏と共に大阪の碩儒である。

體育教授の決定

新制大學の必須科目體育の教授は左の如く決定、既に講義及實技が實施されてゐる。

員外教授　醫學博士　木下東作

同　（昭二、大經）　石渡俊一

講師　（昭二、大法）　菊川博文

同　（昭七、大法）　猪飼永太郎

同　（昭十、大法）　津田弘

學內報

左記の通り人事の異動があつた。

七月十六日付　主事補　平井三郎

學生課長に補する

九月二十一日付　專門部教授　疇方貞亮

經濟學部兼專門部教授に任ずる

九月二十一日付　教授　福島四郎

學部學生部長に補する

九月二十一日付　專門部教授　山口辰雄

專門部次長に補する

九月三十日付　教授　中谷敬壽

法學部長を解く

九月三十日付　教授　矢口孝次郎

經濟學部長を解く

十月一日付　教授　和田豐二

法學部長に補する

十月一日付　教授　三谷友吉

經濟學部長に補する

十月十三日付　教授　植田重正

法學部次長に補する

學會

フランス學會

今回フランス研究會をフランス學會と改め一箇の權威あるソシエテ・サヴアントとして新發足、宮島理事長の斡旋に依りフランス領事館より多數の圖書が寄贈せられ一段と充實强化される筈。

政治學會復活

七月十三日（火）午後一時より豫科講堂において發會記念講演及座談會を開催、會長岩崎學長の挨拶、中谷法學部長の講演「法と政治」あり。終つて學生ホールにおいて學生を混へ活潑な座談ゼミナールを展開、夕刻盛會裡に閉會した。

「人文科學」愈々刊行

關西大學研究論集復刊して

大學の研究發表機關誌としての關西大學研究論集の復刊わ、學の內外各方面より熱望せられて居たが、愈よ來春早々刊行發賣の運びとなり、誌名も新に「人文科學」と改め、學界にデビューすることになつた。

尙復刊第一號の執筆者わ左の各教授である。

法學部　岩崎卯一、山木戸克己
文學部　岡野留次郎、進藤浩二郎、吉永登
經濟學部　鰐方貞亮
商學部　今西庄次郎
工專　橋田慶藏

學友

厚生部の活動

九月十六日厚生會館設立以來、名實共に畫期的躍進を以て厚生事業に乘り出した厚生部は教職員及全學生の絶大なる支持とその鞭撻の宜しきを得て着々とその內容を充實しその成果は大いに期待されてゐる。

厚生部委員としては左の通りである。

（十二月九日現在）

會館責任者　赤木榮
部長　舊法二　早田喜行
副部長　新經三　藤井慶三
〃　大小島熙
〃　岡野義夫
〃　芦田潔
〃　一　高田義幸
〃　藤田忠雄
〃　仁科和義
〃　世良博重
豫科一　廣瀨渥美
〃　八島統
〃　寺谷陽一
〃　西脇清行

尙主なる事業の內容を擧げると

一、學生アルバイト紹介
一、書籍販賣
一、委託品販賣
一、各種配給品取扱
一、寮生管理
一、各商人の監督
一、食堂經營
一、その他一切の厚生事業

等であつて猶將來あらゆる面に亘つて擴充强化したいと張切つてゐる。

尙厚生會館內の指定商人わ別項の通り

長谷屋洋服店、司屋纖維工業株式會社、西野、片野兩洋服店、坂本文房具店、森川靴鞄店、稻上時計店

全商品は市價の二割引であつて學生の便宜を計り大いに歡迎されてゐる。

舊學委、副委員長辭任

舊學委の前委員長、前副委員長であつた福竹君は今般家庭の都合により委員辭退を申し出た。

舊學任は福竹委員辭任後法學部委員未定のまゝ次の通り決定した。

委員長　田中幸治（經）
總務　上田忠信（經）
涉外部長　寺西武（法）
厚生經理部長　赤木榮（經）
庶務部長　城尾一夫（法）

辯論部夏季遊說

辯論部は七月十一日より二十四日まで廣島、山梨、鳥取の三班に分れ夏季遊說を行つた。

各地方町村の積極的後援を得て新憲法の理念を徹底させ「ユネスコ」の灯を點じ尾道市はじめ各地に「ユネスコ」準備會を發足さすなど多大の成果を擧げた

（二十三頁に續く）

座談會

〝大學祭の今昔〟を語る

司會者　專務理事　春原源太郎（昭7大法卒）

昔を語る人

理事長　宮島綱男氏
經商事務課長（大12專法卒）山本順應氏
秘書課長（昭4專國卒）安井章吾氏
渉外課長（昭7大法卒）原　良人氏
學生課長（昭8大法卒）平井三郎氏
第一高等學校教諭（昭6大法卒）齋藤善三氏
（昭3專經卒）松井廣瀨氏

今を語る人

昭和二十年大學祭委員長　西田　健氏
昭和二十二年大學祭委員長　上野勝也氏
本年度大學祭委員長（舊法二）井元弘平氏
〃〃總務（舊法二）大平良純氏
學友會委員長（舊經三）田中幸治氏

專務理事―今日は大學祭の今昔を語ると云ふ題で皆さんにお集り願ひまして、終戰後の大學祭やら、今後の大學祭のあり方について、皆さんの御意見をお話し願ひたいと思ひます、先づ第一回の大學祭をやられた宮島理事長の苦心談をお聞かさ戴き度いと思ひます。

理事長―第一回は大正十五年でしたね學舍、運動場も出來上り、丁度大學にも昇格した頃でした、當時關西大學は世間にあまり知られていませんでしたし又卒業生も關大卒業と云ふ事を云ふのを、はゞかつていたと云ふ狀態でした、そこで當時日本一と云はれた「アメリカ」式のグランドも出來ましたし、米人も千里山に來てこゝはアメリカ、ユニバーシティだと云はれた位にうまく出來ましたので、學校宣傳し世間に知らせる意味で大學祭を行つて學校の存在を知らせようとしたのです、まあ、かう云ふ風にして大學祭をやり、名士を招いて三萬人の人をよんだのです、これには全く世の中の人は驚きました、それには學生も教授も心を一つにしてやりましたよ、當時は、千里山と云ふとあまり知られてをりませんでした、それで學生を各々ミナルに配して案内に遺憾なきを期しました。ために名聲は頓に擧がりました、又吾々自らも良く出來たと思ひました。そして一、二、三回位まで私がやりました、大學祭はそれから關大の年中行事となつたのです。それで私の希望としましては今後も關大の年中行事として永久にやるべきだと思ひます、大學祭は最初は宣傳のためでしたが、來年からはもう少し考へてもらいたいと思ひます。大體二十年を經た今日、大學祭の內容はきまつて來た、だからその內容に如何にも大學らしいと云ふ處がなければならない、會社や中學生のやうな運動會とは何處か違つてゐると云ふ處を計畫すべきであると思ひます。

それから「大學祭」と云ふ名前についてですが私は十五年の春から考へていたが、さて教授會に「大學祭」と云ふ案を出した處が、祭とは神樣に關した事ではないかと云ふ反對でありましたが、關西大學の歷史の祭と云ふ事でありアメリカの大學に於ては「フエスティバル」がありますし、「オツクフスオード」のボートの如きものもあると云ふ事で外國の例の如く「フエスティバル」と云ふ意味にをいて大學祭と云ふ名前でもつて出發しました。

專務理事―松井君は第一回の大學祭ちやなかつたのか

松井―第一回ぢやありません第二回です、この間の大學祭を見て感じたのですが今日の大學祭は、大學祭かそれとも學生祭かわからないやうに思はれます。

理事長―私もさう思ふ、それから先生も學生がやるのを見ていてやるだけの親切がなければならないと思ひます、この點をまとめて行く事は吾々の責任であるかもしれないが、最近は何かしつくりしないやうな處があるやうです。

松井―現在は何もかもすべて學生がやつてゐる。

理事長―學生も社會人であるから自由に放任しています、けれども憎まれても、やはり親は出て行つて面倒を見てやるべきだと思ひます。

專務理事―第一回の私などの時は教授も卒先街頭に進出して講演會などをやり文化方面にも進んで行つてやつたもんですが。

理事長―松本先生（元學長松本亟治博士）も大學祭に非常に積極的に活躍

されたもんです。

山本—大學祭は大正十五年に始まりましたので回數は昭和の年代と同じであつたのですが、昭和十七、八、九二〇年の四回が戰爭で拔けたので今年は第十九回目だと思ひます。當時の豫算は四千圓でした。大學祭も內容としては色々と異つて來てゐますが、大學祭はやはり、學生だけでは充分ではないと思ふ矢張り教授、職員も學生と一致協力してやるべきだと思ひます、特に教授や職員は過去を知り將來への色々の考へもあることですから適當な方々と事前に相談し指導を願ふのがよりよい結果が生れるのではないでせうか。

井元—法律相談所、政治研究會は學部が參加しましたがその他のデコレーションは豫科生だけで、今年で豫科もなくなるので豫科の華を飾ると云ふ意味に於てやりました。

原—先輩校友の方ですが今年の結果より見ると先輩によびかける技術的な面は學生に徹底していなかつた憾みがあつた、學生の方から何らかの連絡があるかとまつていたが、なかつたので實は私が本部の方にうかゞつたやうな狀態です。

專務理事—第一回の土人踊りとくらべるとどうですか。

私は豫科の二年の時でした。第二回には歌を作つて新聞號外を出した、「優し女ほど土人に惚る、關大グランドの土人踊り」とか云つて鐵風に歌つたものでした、土人踊りは近くでは大高、浪商と關大でしたが關大が一番よかつたとの評判でした、それを豫科が今迄うけついでいた。假裝行列はどうかね、大體男は女に女は男に扮したがるものだが。

大平—「ジュニアー」的にやればそれでもよいのですが大學としてはどうかと思ひます。

專務理事—吾々が大學祭をやる時には皆寄り立てゝやつたものだが、學生を一本にまとめることについてどう思ふかね。

上野—今日一般學生そのものが大學祭をやるよりも生活が勢一杯であると思ひます。自分がやつた時などはまだ一つの秩序を作る事を考へるだけでよかつたので今に比べるとやり易かつた。

專務理事—模擬店の方はどうだつた。

田中—主體になるものは學友會と云ふ事ではなしに今年は新制學部が主體となつてやつた。

大平—模擬店を執行部の方でとりあげた。

專務理事—今年のポスターについて。

齋藤—數が少いやうだ、吾々の時は各自が引受けてやつたものだ。

原—私らの時は心齋橋にまで辯論部が進出して路傍宣傳までしてビラを撒いたものだ。

大平—今年の大學祭は踊りを中心にやるつもりでしたが運動競技が多くなつて終まつて、ラクビー、アメリカン等は一般にはうけられなかつたと思ひます。

原—吾々の時には新聞部が號外をまいて行はれてゐるものゝ說明をした。

專務理事—ダンス、パーティをやる樣になつたが、これについてどうか。

上野—ダンスを行ふのは自由だから良いが學校でやるのは良くないと思ふが、今年の大學祭を見て今年は働く二部の學生と共に大學祭を味ふと云ふ意味に於いて良かつたと思ふ。

專務理事—大學祭に來た先輩から何か希望をした人はなかつたか。

井元—個人的なものはありましたが、まとめてはなかつたやうです。

專務理事—今後こうあつて欲しいと云ふ點、又大學祭のあり方と云ふ樣な點について何か。

上野—初めての新制の下に行はれた大學祭であり、今までの大學祭は豫科生であつたが、しかし今年は新しい新制大學としての感覺があるかと思つたが、新しい何物もなかつた事は淋しかつた、お祭りを遊んだと云ふ處が多かつたやうです。

大學祭の日を以て一年の終末として次の新しい出發として新しい學歌の發表があるべきだと思ひます、私の時代には皆大學祭の終りに感激して踊つたのであるが、今日の學生は大學祭に批判的なのかどうかわからないが何か愛情をもつていないと云ふのは淋しかつた。

專務理事—大學祭に殘してをきたいものは。

西田—大學の大學祭にしなければならぬと云ふ點に於て大學が一體となつて眞に家族祭としてやるべきだと思ふ。

安井—大學祭は先輩と學校との關係を親密にすべきだと思ふ、私は東京で慶應の豫科祭の宣傳隊を見たが、トラックに校旗を押立て先輩と學生がブラスバンドで街頭を華やかに練つてゐたがこの樣に先輩の應援を求める事も又辯論部も結構ではあるが音樂部あたりで大樂をひきつける事も望ましい事だと思ふ。

平井—大學祭の行事は當然記錄にとゞめてをくやうにしたい。

專務理事—同感、大學祭の記錄は、亦大學の歷史でもあるのだから、色々とお話を承りますと、泉の如く盡きないのでありますが、本日は、一先づこれで閉會したいと思ひます、どうも有難うございました。(閉會)

學生時代の思ひ出

今秋新制大學第一回（通算第十九回）大學祭を迎へ、六十有餘の星霜經る大學史に更に新な一頁を加へたことわ、洵に御同慶に堪えません　其の間の想ひ出わ、大學としても、將又卒業生諸君としても數多い中から、各界名士を煩わして、嘗つて過ごされた學生時代の想ひ出を語つて頂いて、生きた大學外史の一斷面を窺ひ、其の中を貫く關大精神とでも云ふべきものを掬することが出來るならば、現代の私達が此を深く反省し、今の世代の若い學生諸君が傳統に生きる發展を受繼いで明日の大なる飛躍への礎石ともせられたいと念願しつゝ　敢へてこの一集をものする。

法學博士　武田宣英

略歴　私は卒業後約壹年間井上先生の膝下に在りて先生の著述の御手傳を致しておりました。法律雜誌の原稿や定期刊行の講義錄等などは別としても、まとまつたものに、至當時新に發布された商法全篇一千二十四條の逐條講義が商法講義として大阪國文社より又新に改正發布されたる刑事訴證法講義が東京明法堂より出版されました。其何れもの原稿がすべて私の執筆に係るものでした。私は之に依て先生より學資を戴きました。和佛法律學校は東京法學校と佛學會とが合併したもので、關西法律學校とは佛法系で互に連絡があり私共十七名の卒業生中當法研究を志して東上するものはすべて此學校に入りました。武内作平、内田重成、黑田莊次郎、山口直三郎等の諸氏は皆然り。獨り私は遲れて一年後に同校に這入り卒業のときは偶然にも優等第一席で佛學會長閑院宮殿下臺臨の式場で卒業生總代として答辭を讀み殿下より賞品を戴くの光榮に浴しました。それにも拘らず私は不思議にも親しみの程度に於て關大とは比較になりませぬ、是私が關大を母校中の母校であると言ふ所以であります。又私は裁判所構成法實施後最初の辯護士試驗に及第しました。受驗者超一千名及第者四十名、然して私は其中で比較的善い成績で（十位）でした。一兩年引續き辯護士をして今日に至り既に約五十有餘年を經過しております。私は斯の職を理想的榮職と心得ておりますので、仕事はせずとも終生其職に在りたいと念願しておりますので此處十數年は殆んど事務は執りませぬが、今に第一東京辯護士會に屬しております、斯樣にして辯護士の實務を離るゝと同時に育英方面にと關係するようになりました。六十年の歴史を有する社團法人土佐協會は土佐出身者の社交團體でありますが、此事業は主として育英で、私は嘗て選ばれて理事長となり今當會顧問として携つております、九段精華高等女學校、日本齒科醫學專門學校の顧問でもありました。關大との關係は以來其の通りです。日露戰役直後私は私費を以て渡歐の生活を送つております。

私としては大阪の地は第二の故郷であり、關西法律學校は母校中の母校であり、又同校創立者の一人なる井上巢先生は第二の父である。此思出深き學校に在りし昔を語ることは、私の最も欣幸とするところである。いざ其の想ひ出の二三を語らん。私は井上先生家より學校に通ふたので入學より卒業まで三年間に先生より受けたる感化は實に大きい。人は先づ獨立の計を立て然る後天下國家を論ずべきであるとて、詩文の稽古さへも獨立の計を立てたる後の餘技であるとして許されませんでした。時恰かも憲法發布があり、議會の開設も目睫に迫り、政談論議が盛に行はれ、各種演舌會の催ふしも流行の一つであつたが、今は陳勝吳廣の出るときで高祖の出る幕でないと言はれました。而して私は陳吳ともならず勿論高祖とはならず、一生を無趣味に馬車馬的に過して來ました。關西法律學校創立の動機は、人も知る如く、其の當時大阪の地には只僅かに特志の代言人に依て設けられたる私塾的法律研究所機關の一二あるのみで、法律專門の學校を大旱の雲霓を望むが如く渴望されておりました。其處へ其の多くは司法省八年出身で法律新智識の持主なる大阪控訴院同始審裁判所在勤の判檢事諸氏が、時の控訴院長兒島惟謙を中心として、法律專門の學校創立の擧に出でられたのである。其の創立趣意書には、バリーに對するリヨンの如く、此の佛國リヨンにも比すべき大阪の地に法律專門の學校のなきは一大恨事で、吾等は之を創設し新進を教育し國家の進運に貢獻せんものと、堂々數千文字が掲げられました。私は時折り井上先生より承るのでした。自分等は國費を以て法律を學び今日を得たのであるから此の浪速の地に法律學校を設立し

後進を誘掖し國恩の一端に報ぜねばならぬ。かくて同志の者が期せず一致し此創設を見たのであると。その樣な動機で出來たのであるから、勿論創立者は手辨當で講師となり、時には校舍に充てられたる天滿興正寺の使用料も立替支拂はれたこともあつた。授業料は月七十錢、學生二名の授業料免除が講師に與へられたる特典で、私は其の特待生の一人として三年間の科程を卒へました。事務員に多田典吉、小使に野村吉松是れ亦僅かに生活を支ふるだけの給與でした。かくの如く物質的には貧乏でしたが精神的には和氣藹々で、上は兒島より下は吉松に至るまで恰かも一家の如く、時の文部大臣榎本武揚も來られ、又日本政府の法律顧問なるボアソナードも歸國に際し態々立寄られ一場の講演をされました。第一回卒業生は十七名で、私が丁年未滿の一番年少者でした、此の一番年少者の私が八十歳に垂んとするのであるから他の多くの方々が故人となられたのは怪むに足らぬ。其の後有名なる大津事件にて、大津地方裁判所で開かれたる大審院法廷に於て時の政府高官元老共が一樣に、津田三藏を我皇室に對する不敬罪を以て處斷し極刑に處し、以てロシヤの激怒を緩和せんとするに對し、極力反對し遂に謀殺未遂の普通罪を以て處斷し我邦法官をして其立場を守らしめ國家の非常時に善處したる大審院長兒島惟謙の功績は和氣清麿の護王の神なるに對し護法の神として永遠に記念さるべきである。此の兒島の精神は其の片鱗を私の在學當時朝鮮事件即ち大阪國事犯事件に於て現はされたのである。其の時の裁判長は井上壙檢察官は堀田正忠であつた。我關西法律學校は、此等の方々に依つて、此の精神に於て、和氣靄々の裡に呱々聲を擧げたのである。

村尾靜明

私は明治三十四年九月（學期は九月から翌年七月まで）に入學致しました。當時は司法省指定、文部省認定、私立關西法律學校と呼ばれ北區の興正寺にありました。此の寺こそ、法學研修のため勇躍通學致しました、最も思い出の深い寺小屋式學園でありました。司法省指定とは、卒業後、判事檢事辯護士の試驗を受くる資格ある旨の同省の指定を意味し、文部省認定とは專門學校令の發布にともない、在學生に徴兵猶豫の特典を與えらるべき同省の認定を意味するものであります。

入學志願者は多數でありましたが、二百餘名が入學致しました。本堂には一年級が、庫裡には二、三年級があてられて、教場も先生の控え間も、みな疊敷きでありました。その疊の上に八束机を並べ、腰掛椅子に四人詰でありました。机の下には、書籍包や、下駄、傘までも置くわけで、大へん窮屈でした。勿論生徒の座席制は無いのでありますから、最初は先着順で自然前方を爭いましたが、何時とはなしに周圍に親しみができまして、座席制の樣に一定の場所を得る樣になりました。

日々の授業は午後五時から八時まで（土曜日は午後一時から三時まで）でありました。夜間授業でありますから、燈火を用いました。天井から石油ランプが吊り下げてあつたのですが、數が少いのと高いので、大して明るくなく、辛ふじて筆記を爲し得る程度でありました。講義は筆記主義でありましたが、萬年筆が未だ無い頃でしたから、最初先生の口述を鉛筆でかきとつたため、後で毛筆かペンで淨書して居りました。が毎日の講義に追われて、とても淨書することができないので、下書を廢することにしました。そこでペンか毛筆で書くかの二途を選ぶの止むなきに至りました。ペンではインク壺が教場の八束机の動搖でひつくりかえるのと、持廻りに不便もあつたので、多くの生徒は金屬製の墨壺（矢立を用いる者もあつた）を携帶し、毛筆を以て口述を筆記することにしました。

讒つて當時の生徒の分野を見ますれば、晝間は一定の業務に從事し、夜間を利用するというのが殆んどであつたと信じます。十一月號の朝日評論に長谷川如是閑氏の「自叙傳」の記事中に、同氏が十五、六才の頃明治法律學校豫科に入學したところ、生徒の年齡の不揃いに一驚したといつてありますが、私達の入學しました頃も略ぼ同樣で、十七、八才から三十才代の晩學の人達もありましたし、大體は二十才乃至二十五才が多數を占めていました。

服裝は區々でありましたが、和服が主で、羽織袴が多く、流石に着流しは見受けませんでした。羽織は元より冬季に用いた譯ですが、それが大抵木綿の五つ紋付であつて、中には羊羹色に褪げて古色蒼然たるものもありました。羽織の紐は白太の、二尺位の長いのが流行し、その先を繰くり、ブラブラさせていました。中には三條詣りに珠數を首にかける樣に、紐を首にかけている者もありました。服裝を飾らぬと謂わば謂うものゝ實をいゝますと、飾るだけの經濟的餘力がなかつたのでした。

私は下駄履きでしたが、雨天の夜には跣足になることは、敢へて珍しからずでした、電車のない時代であるから、遠方から通學する者は時間を惜んだ譯です、私の住まいは三軒家（現在の大正區）であつたので、高下駄でごつごつ歩くことは堪えられなかつたので

す。當時通學生は前に述べます樣に、官廳や會社等の書記とか、雇員などで概ね薄給（日給二十錢位から月額十圓前後迄）でしたから、從つて財布の中の小使い錢は、一圓持つている者などは良い方でした。

月謝は五十錢か一圓以内だつたと記憶しています。こんな風でありましたから娯樂的な方面にはおよそ縁が遠く、「それどころではない」といつたところでした。然し他日成功するという強い意思から、意氣衝天の熱を以て、勉學したものであります。

學生の元氣であつた一例としましては、授業のあいまの十分間の休憩時間（學生の開放の時）に、心ある學生は先生の退場を、待ち受けて講師席に躍り上がり所謂先占によつて教壇を占據しまして演說を始める、無論それは法學のことがらであつて、法律の解釋もやれば、先生の論旨をも駁する、或は時事に關連して法律を論究するという、滔々數百言に及びます。聽き手は生徒なるも、その聞くと聞かざるとに拘らず、勿論場内の喧囂や罵聲などには一向無頓著で、一面からみれば辯論の練習ともいえたのであります。内藤正剛、兼松兼太郎、赤坂惠龍の諸君は、そのもつともなりしことを記憶します。

井上和夫

略歷 大正一四專商。銀行、會社。公立學校教官（約二十年）。校友會高知支部副支部長。最近は著述（既刊十卷。文部省其他學術團體研究從事）

男女共學……文科が新設され婦人聽講生が二三人入つた。毎日登校される道筋の廊下は兩側に男生が歡迎申上げている中を、立派なモダーンスタイルで平氣に歩かれる勇氣に充ちた方々だつたが、その麗人の一人に、後に法科え替られ、新聞社入りなされ、洋行もして「ヒゲ」とかいう珍著の主北村女史もいられた。女に高文を受ける資格が何故ないかと、内閣え談判されたというが、今生きていられたら、女議員か、女大臣でもあろう。學長の織田萬博士がブラッセルの國際判事に榮任される挨拶も振つていた……諸君私が今度あちらえ參るようになつたのも少々佛語ができるからです。どうぞ皆樣も語學を精出されるよう……。山田耕作氏の作曲で山岡學長作詞の新學歌を、豫科の名コンダクター中村氏があざやかなタクトで指導されたこと。大錦の全盛頃、母校の角力は大濱をうならせ、玉錦關の如き大物を送り出したのもそのころのことだ。

織田佐代治

略歷 大正十四大學法學部卒業、大阪府警部補拜命警察部保安課、交通課を經て額田警察署長、池田警察署長、大和田警察署長、東警察署長、大阪府勞政課長北河内地方事務所長を歷任し昭和二十二年三月退官

當時の千里山は野趣に富んだ雜草の咲亂れるそれは全くの田舍風景であつた。千里山終點に京阪電鐵の經營にかゝる赤屋根の住家が點々とあるだけで從ふて千里山線は關大學生通學專用車の感が深かつた、森君（現在布施市議）が乘務員の態度が氣に喰はぬとかで一大活劇を演じたのも其の頃だつた。校舍は一棟だけだつたが明るい教室だつた、一期の小林君（舊姓馬場）や西川元君などは豊津の關大專門カフエーで毎日豪遊を續け僕たちをうらやませたものだ、現在實業界で羽振をきかせてゐる中井淳一君や森辰之助君なども吹田豊津の女性にヤンヤともてはやされた組だ、同期生の仲は良かれ惡しかれ實に一致したものだ、みんな學校へは出てくるが教室に入る學生は殆んどなかつた學校は午後あそびに行く打合をする場所位に心得たと申してよかろう。

春は附近の筍をあさり秋はみかん荒しに專念し番人ハチ公に追ひ廻されてさんざんな目にも逢つた、何んとそのハチ公は校友岸田駒太郎君の山番だつたのだ、とにかく岸田君の所有柿みかんは相當頂戴したものだ。

武田先生、小泉先生は我々に同情し落第點をつけてくれなかつたので入氣は大したものだつた、ことに僕は一番ビリだつたのでその感謝の念は更に強いわけだ同期の芳野爲四郎君は雄辯家で成績も良く卒業の際は辭書を賞與された優等生だつたが此の君と僕がはからずも警察界入りをしたがどうしたことか彼は數年後失敗し僕はどうにか最後まで奉公が出來たことを想ふと學校の點數はあまり實社會では正比例せない場合もあると思つた。

岩崎先生のエーギヂングス先生とエーエー催が向ふの社會學のノートは今でも懷しい想ひ出だ、昨年本年の大學祭には相當たくさん卒業生が家族をつれて集つてゐた、今は良いお父さんも昔は此の學校で勉强をサボツたものだと家族に話したかせぬか。

森寛紹

略歷 大正十五年學部法科卒業、高野中學監事、眞言宗學務課長、高野山大學學監、和歌山縣高野山普賢院住職、高野山眞言宗宗會議員、高野山大學理事、眞言宗立京都淑女高等學校理事

老人らしいものゝ考へ方が何に一つ出來て來ない私が三十年昔の大學生などとは自分ながらどうしても考へられないことである。

金ボタンに角帽で千里山を歩いてゐる浮き浮きした姿が自分の何處かに未だに離れずに殘つてゐる。大學

に入學した大正十年は昇格運動や大學の充實と云ふ事が學生の最も大きな關心であつた。度々學生大會を開いて垂水理事を困らせたのも此の頃である。豫科二年の吉野君や織田、小林、吉田、馬場の諸君や自分等の豫科一年では高田德竹、米田、木村、角田、豊田、森喬君等がいつも選ばれて此の運動の中心をなしてゐた。

突然奈良の三笠山で學生大會を開いて昇格運動の貫徹、若し大學當局の誠意の認められない場合は同盟休校、更に總退學決行、この運動の間は轉學退學は絶對しないと云ふ意味の誓約血判をしたのも此の年の初夏の頃である。その當時の織田君や吉野君は下級の僕等には相當大成した人にも見え恐ろしい人にも見えた、此の運動に軟弱であつたり誠意を缺いだり脱落したものは制裁の脅威を受け大阪の町は歩けぬとまで若い私たちは恐い思ひをさせられたものである。制裁を受けてゐない私は此の血判にも加つてゐる筈である、高田君や豊田君あたりが此の血判狀を今も尙持つてゐるとか誰かに聞かされ、一度見せて貰つてあの時代の大學への情熱をもう一度呼び起して感激を味つてみたいものである。

思へば明治十四年思想の海に濤荒れて、の校歌が、自然の秀麗人の親和の學歌に替えられ千里山の學舍以移つて以後の私等の學生生活は洵に希望に滿ちた輝しい樂しいものであつた。美貌の北村筆子さんが入學して來て男女共學の尖端をきつたのも此の時である。

千里山電車の賃金値下の運動を起して學生が不乘同盟を結んで會社に對抗したのもその頃で一ヶ月の定期券は三圓か五圓程度のものであつたと思ふ。

學生も多樣多彩で特長のある人が多かつた、勉强組には在學當時既に高文を二つ共合格してゐた戸田君や野村君がゐた、戸田君は關大の留學生としてロンドンに勉學中客死した、野村君は卒業後二三年して是れも堺で病歿した、不當利得？の博士論文を夢みてゐて若し是れで博士になれたら、それこそ不得利得だ等と病床で笑つて話をした事が思ひ出される。法名は故郷の坊さんがつけたので修學院と書いてゐたと記憶してゐる、住友銀行の丹羽君、警察にゐた武良君、辯護士の福西、土井、金坂、井上、三輪、の諸君や岩崎、山崎の兩君等も成績の良い方の組だつたと思ふ。森喬君や高田、米田、木村君は當時の所謂硬派であつたが純情で學生間の信望を聚めてゐた。温厚篤實組の谷口、野間、松原、大泉、山本、三宅、中野の諸君や、學生當時既に社會運動に興味を持つてゐた豊田、菱川、清家の諸君は今頃どうしてゐるのであらうか。

角力横綱の竹田君、學友會のいつも幹事を勤めた德竹君、角田君、皆印象の深い人達である。

角田君や柏元君、神保君は卒業後二十數年の今日も變らず母校と密接なる關係を保つて大學の發展に關心を示されてゐると聞いて感謝と羨望に堪へぬ。

安井章吾

略歴　昭和四年專門部國文科卒、昭和九年官廳生活を辭し關西大學職員、現在關西大學秘書課長

文學科國漢專攻の第一回生として卒業してから、盧生の邯鄲の夢ではないが、アッと云ふ間に貳拾年を過去の昔に煙としてしまつた。私は大正末期に關大に入學したのであるが、當時學生界を風靡したものは、未だ明治學生氣質の流れを汲んだ弊衣破帽とデッカンショ節であつたが、一面漸く慶應型と稱するおしやれな伊達學生も旣に顯はしだした頃である。

其の當時の本學では、學長が元滿鐵の副社長であつた商法の權威、松本烝治博士（後の齋藤內閣商工大臣）で自轉車スポーツに趣味を持たれた、至極圓滿な方でした。專務理事が今の理事長宮島綱男先生で、學內行事は最もエナージチックな時代で、クローデル或はロベール佛國大使、又はアメリカの大學教授、犬養毅、後藤新平、永井柳太郎氏等と、海外諸名士の講演歐米への關大留學生の派遣に西洋文化との交流が活潑に行はれてゐた。

運動競技は黄金時代で、どの種目も强く、東都遠征の際には東京市電の廣告ビラに「强剛關大來る！」の警報がはり出されて、東男の心膽を寒からしめたものである。

大體、私の家は先祖から神職を業としたが、どうした風の吹き廻しか私は堅い事が厭で、劇・映畫・小說に凝り出し、名が章吾だと云ふので新國劇の島田正吾にかぶれ、俳優になろうか、いや當時無聲映畫で鳴らした活辯（映畫解說者）になろうか、或は轉進して小說作家を志望しようかと迷つた揚句、とどのつまり先づ修養第一歩として開設創々の關大文科に入學したのであるが、多面的で漠然とした此の文學科に集つた同期生の中には、私達の樣なヅボラグループの他に、眞面目な僧侶、教師志願者があり、從つて教室のアトモスフィアは混然たる人種市場の樣相を呈してゐた。其の結果は作家の北條秀司、講談本に中正男、劇作家に村井富男、詩人藤本浩一を生み、本學國文教授に吉永登　安川安太郎の諸君を輩出したのである。私は活辯界に進出をもくろんで失敗したのであるが、當時大阪では松本狂郎、木田牧蓂、人見壽郎に對して東京の德川夢聲、生駒雷遊あたりが第一線の錚々たるものであり

在學中私は其の總帥、道頓堀の松木狂郎の門を叩いて教を乞ひ、鄉里の實家から勘當を受けた事がある。

恩師の面影を偲ぶと、坪内士行先生の英語の時間は父君逍遙先生譲りの「沙翁劇」のセリフ・シグサを實演して頂くのが樂しみであつた、先生は寶塚の名女優雲井浪子さんを模樣に持たれて、仲睦じく心齋橋ブラをやられては岡燒連の口雀が五月蠅い程であつた。

府女專校長の平林治德先生の「馬方三吉」の名調子も想出の深いものである。又瀧村斐男先生の美學に藝術論は教案草稿なしで、兩手を後ろに組んでコツコツと靴音を立て乍らの講義で、速記をやりつけぬ學生には苦手の先生であつた。

其の他に碩學藤澤黃坡先生（作家藤澤桓夫氏の殿父）の漢文は「眠つてゐたらあきまへんでえ！」調の大阪辯で至極難解な老莊の學等を解り易く說かれ、上方落語でも聞かせて頂いてゐる樣な調子で、とたんに漢文が好きになつたと云ふ名講義振りである。しかし今では故人になられた篠田栗夫先生の易學には弱らされたもので、筮竹、算木を恭々しく教卓の上に出されて、南無乾坤と實習を受けたが、級友一同、當るも八卦、當らぬも八卦なんて馬鹿にして仕舞つて、誰一人として之をマスターする者なく解らぬ仕舞で終つたが、今にして思へば灯ともし頃の淀屋橋あたりで、ほのかなローソクでも立てて、內職に俄か易者が出來たであろうとくやしまれる。

扨、私達少人數の文科の教室は、福島學舍の雨漏りのした貴賓室の跡で「四疊半の水いらず」ではないが頗る家庭的な教室で、教授と學生が一對一の差向ひで授業を受けた事もある。地響を立てて通る眞前の東海道線の列車が通過する毎に、私達は暫し鳴りをひそめて休憩すると云ふ盥梅で、苦心慘膽を極めたものである。何と云つても今の學生さん達は誠に羨しい限りではある。

吉田三七雄

略歷　豫科から法文學部英法學科へ—昭和一〇年卒業。朝日新聞社へ入社。特派員として華中漢口、佛印サイゴン、シンガポールなどに駐在。現在同社社會部次長。

在學時代の想い出を書けつて、四百字詰の原稿用紙三枚以內じや無理ですよ。だつてそれぢや千二百字ぢやありませんか、僕の想い出を數えれば、それだけで千二百程もあるんだから、一つの想い出が一字ということになりますよ。でも是非にとおつしやるのでしたら、そのうちから三つ四つ擧げてみましようか——。

なんと言つても忘れられないのは「大學祭」ですね僕は豫科一年からずつとこの「大學祭」には大活躍をしたもんです。まず豫一の時にはおけさ踊りの振付をし、豫二の時には例の名物土人踊りで僕が酋長の娘になり、豫三の時はノンストップ・レビューと名付けるあやしげなるものを書いて自作自演自監督をやつてのけたんです。今想えば全く恥しくて顏が赤くなりますよ。豫科時代には應援團のリーダー長もやつていましてねえ、肩まで垂れるような頭の毛に、豫科の紋を染めぬいた白紋付を着て……いやはや馬鹿な奴だとお笑い下さいますな。けれどあの當時は應援團も張りがありましたよ。野球部は名投手の本田さんを中心に、關西六大學は勿論のこと、東京へ遠征しても片つ端から薙倒し、米國のアラメダ大學にも勝つという豪勢さ、ボート部もいつも優勝するし、拳闘部も南條實君などがいて勝ちつ放しという有樣、そのほかラグビー、蹴球水泳、馬術、庭球と、どの部も强く、陸上部は大島、戸上の名スプリンターに、今も日本最高記錄を持ちつゞけている槍投の長尾三郎君が居たし、ほんとに關大の黃金時代でしたよ。僕もボートの同好の士を集めてボート部とは別に漕好會というのを組織し、學內大會は勿論のこと、しまいには對抗レースにも引つ張り出されて他校のボート部を輕く一蹴したものでした。

辯論部や新聞部の活躍も素晴らしいものでした。僕も辯論部に席を置いていましたが、專務理事の春原さんや、涉外課長の原さんや、仁丹にいる戸根さんなどが學部に居られた頃は、こわい先輩として僕らは小さくなつていたものです。當時はマルキシズムの研究も浮ついたものでなく、ほんとに眞摯な態度でした。

文化運動の一つとして僕は劇研究會もつくりましたそして「千里山」という同人雜誌も出していましたがこの本はよく賣れたものでした。劇研や雜誌の同人であつた田中友幸君は、現在東寶のプロデューサーとして賣出しています。

勉强の方はどうしたんだ、と言われるんですか？…さあ、それがチト辛らいんです。實はあんまり教室へは入つていなかつたんで……。それでも豫科時代には藤澤先生の「孔子さんの話」や賀來教授の「巴里の屋根の下」のフランス語の歌。學部になつてからは、岩崎現學長の社會學、森下教授（現大藏政務次官）の財政學などが忘れられません。そうら、これだけでもう千二百字になりました。

附記、多方面の各界名士に御寄稿を依頼しましたが、原稿締切迄に届いた分だけを掲載しましたから御了承下さい

校友

校友會常議員會

六月二十二日(水)　於天六學舍

一、出席者

大學側　春原專務理事　原田理事　原渉外課長

校友側　志野覺次郎　大石雄一郎　角田好太郎　三島律夫　大月伸　小山平吉　沖鶴忠　笠置省三　寒川喜一　鈴木武夫　中辻義三　長澤健一　(出席順)

一、決議事項

1、校友倶樂部開設の件

2、關西工專昇格問題の件

七月十五日(木)　於天六學舍

一、出席者　岩崎學長(校友會長)、春原專務理事、下條監事、中谷教授、中務平吉、小川平治　西村治三郎、志野覺次郎、三島律夫、大石雄一郎、角田好太郎、神屋敷民藏　其他　吉木工專校長(關西工專昇格問題に對し出席)原渉外課長、平井厚生課長　羽野出版課長心得

議事は前回と同一の案件について審議す

九月二十四日(金)　於天六學舍

一、出席者　(議長)樫本信夫、下條小野右衛門、西村治三郎、長柄金吾、坂本龍夫、大石雄一郎、志野覺次郎

一、決議事項

1、關西大學校友倶樂部の件　承認

2、學報配布報告の件

羽野出版課長心得より說明あり

3、昭和二十三年度校友會總會開催の件　承認

但し大學祭を避けること關大校友倶樂部を會場とすること　同上會場の都合にて他を撰ぶも可同計畫は渉外課一任とすること

4、校友文庫の件　承認

校友の著書の御寄贈を求む

更に一般校友の不要圖書の供出を求むること

5、其の他

(1)地方校友支部の活動狀況について下條監事より報告

(2)學報の編輯に關する校友側の希望　以上

校友文庫

六十有餘の星霜經る本學わ、其の間幾多の名士を輩出し現代各界に活躍中であるが、此度校友諸賢のものせられた諸著作を、本學の文化活動が生産した貴重な文化財として永く後世に保存すべく、校友文庫と名付けてこれらを蒐集することゝなつた。

關大計理士倶樂部設立さる

本校出身の計理士數は、日本計理士會大阪支部會員の三割近くを占むる盛況に鑑み校友會の常議員であり計理士會中堅幹部たる長柄金吾氏が中心に藤原、鵜飼白井、藤井の諸氏と共に關大計理士會を企圖、昨年十二月十三日北區曾根崎の東亜産業倶樂部にて發會式を擧げた、本學より下條、阿部兩監事、森川、中谷兩教授出席、來會員四十名で盛會を極め、長柄金吾氏司會の下に本會發起の趣旨、下條、阿部、森川中谷各氏の祝辭、藤原大阪支部長より計理士法改正の動向についての報告後、役員を左の通り選定して散會。

顧問　藤原龍太　會長　鵜飼金次郎

副會長　長柄金吾　廣實郁雄

幹事　白井種雄、藤井藤三郎、森田森、鈴木庄太郎、松下忠由、逢坂勝見、上西榮萬

年末總會

同會は十二月二十五日森田森氏の肝入りで南海本線鶴原驛前に於て本年忘年懇親會を開催、來會する者二十數名、本學の森川教授、安井祕書課長を顧問に推して今後の親睦、研究の强化を圖り散會。

夏季總會

同會は九月五日天六學舍に於て夏季總會を開催、參加會員六十名、大學側より春原專務理事、森川教授出席、藤原計理士會支部長顧問として出席し、長柄金吾氏司會の下に鵜飼會長より會務報告あり、春原專務、森川、藤原兩顧問の挨拶あり、終つて校庭に於て記念寫眞を撮つて散會。

附記　本校出身計理士は日本計理士會に於て左記の如き要職を以つて活躍中である。

藤原　龍太　日本計理士會常任理事兼大阪支部長

長柄　金吾　日本計理士會理事兼大阪支部副支部長

鵜飼金次郎　日本計理士會理事兼大阪支部幹事

白井種雄、森田森、山中秀太郎の諸氏は本部總代及支部幹事

關大計理士倶樂部事務所は大阪市北區鳴尾町一〇長柄金吾方(電堀川一三九八番)

大成會懇親會

專門部を大正十一年より十四年迄に卒業または在學せる同窓有志の懇親機關として、鴻鳴會、木偶會等があつたが、中心糸島實太郎君が、北陽商業の校長を辭して歸鄉するなど色々の事情で永く中絶の狀態にあつたので、最近此種會合再建の聲が有志の間に昂り、再度準備委員會を天六學舍に催して審議の結果、十月六日大阪經濟士會館階上にて愈々再建第一回の懇親會を開催、同窓の面々も往年の美少年、今は禿頭の好々爺となれるお互の健康を祝し合ひつゝ何しろ在學當時から相當鳴らした連中とて忽ち談論風發、氣焰萬丈、幹事の緊急動議も聞かばこそ各自歡を盡して舊交を溫め今後大成會と改稱して永續的の集ひとし、育英資金其他事業を計畫、先輩として母校の爲め後進の爲め大いに成さんと誓つて散會、當日の出席者左の通り。

宮島理事長、岩崎學長、森川太郎、西本寛一、山本順應、土橋四三、池谷龜太郎、廣實郁雄、塚本利三郎、山本彌一郎、霜村盛鄉、中谷政男、馬場次郎、松岡爲吉、津田米太郎、一木正光、佐藤匡、矢野國臣、梅原貞治郎、三輪又右衛門、岸本忠雄、米田信太郎、江口透、名倉熊藏、壹田倫夫、浮田時太郎、加治信一、古川浩一、久田一榮、藤波一治、岸田駒太郎、天野平一、示田奈良太郎、笠置省三

大成會役員決定

校友大成會では十一月八日常議員會を天六學舍にて開き、役員を左の通り決定した。

理事長　西本寛一、副理事長　森川太郎、同池谷龜太郎、理事　山本順應、同霜村盛鄉、杉田兵作、監事　廣實郁雄、同谷岡登、常議員議長　三島律夫

校友會大阪支部總會

十一月十四日(日)千里山學舍、學部第四教室に於て新制大學發足後初の總會を開催、先づ渉外課長原良人氏開會の辭をのべ支部長中務平吉氏の挨拶、學長代理和田教授、大學側より春原事務理事の祝詞あり終つて懇談會に入り自己紹介などあり昔話に花を咲かせて和氣靄々裡に大學の發展と會員各位の健闘を祈りつゝ散會した。

當日出席者

阪東勇治、中務平吉、神保敏男、米田恒治、樫本信雄、下條小野右衛門、志野覺治郎、鵜飼金次郎、荒木達雄、西村治三郎、武田藏之助、西本寛一、長谷川重治郎、壹田倫夫、馬場次郎、西尾專太郎、森川太郎、村尾靜明、島津德三、大島武夫、高橋良美、北原元茂、大月仲、馬場弘道、山根潤藏、上西榮萬、八木萬太郎、後藤正身、織田佐代治、長柄金吾、池谷龜太郎、和田豊二、吉田太喜雄、中島輝弘、梅原貞治郎、松井廣瀨、藤林物三郎、中井淳一、春原源太郎、安井章吾、原良人

（受付順）

關大アベノ會誕生

大阪市内阿部野區内在住又は勤務者より成るオール關大出身者の同窓會である關大アベノ會が生れた、大阪に於ける主要地區だけに之が結束によつて相當大きな母校の外郭團體が出來るものと期待される、發起人氏名左の通り。

山本義一、濱田光明、岩井宗一、竹田繁七、小島龍太郎、江村至身、上西榮萬、高田明、原口爲一、林佐一郎、鈴木武夫、原良人、以上の發起人總代、鈴木武夫

堺支部總會

八月七日堺商工會議所に於いて校友會堺支部の發會をかねた總會を開催、正副支部長に中村源次郎（辯護士）堀畑岩一（堀富商工社長）井上專一郎（洋服商）を互選、學長のなつかしい講演に、一日大學の教室を思い出し盛會裡に終了。當日の出席者

中村源次郎、堀畑岩一、上村靜馬、溫江敏夫、井上武藏、伊藤新治、山本甚三、鈴木淳三郎、吉村眞一、西田昌弘、一木正光、門田文三、入江寅三、戸井孝一、西田市一、井上專一郎、内海潔、市川信、小西登一、執印正俊、島野末雄、西原猛、廣瀨隆一、太田周市、木村滿、川島楠治、石川仁一、東條重一、植田七郎、矢野克已、白野信三、岡崎繁、今井恒雄

本學側　岩崎學長、春原專務理事、原渉外課長

校友會和歌山縣支部臨時總會

十月十日(日)和歌山市クリスタルクラブに於て、校友會和歌山縣支部臨時總會を開催、集り會する者五十二名、小林幹事長司會の下に、一般會務報告、久田支部長の挨拶、宴酣の後「自然の秋麗！」と高らかに合唱、別れを惜みつゝ盛會裡に終了、

因みに二十三年度役員左の如し

支部長　高垣善一、副支部長　久田一榮、酒井正種

幹事長　小堀欣二、副幹事長　木下榮繁、會計幹事　宮本嘉藏、山本邦輔、常任幹事　林將典、和田茂男　山上鎭彦、澤渡三重郎

校友會福岡縣支部の再建

校友會支部として長い歴史をもつ福岡縣支部では、今夏岩崎學長を迎えたのを機に一層組織的な支部を再建することになり、全縣下の校友を網羅し十月三日福岡市で再建第一回總會を開いた。まず新たに制定した會則を決定、三十年間盡力した池田支部長が校友會本部から表彰されたのを機として勇退辭任、役員を選擧し、今後は民主的に支部の發展を期すことを申合せた懇親會に移り學歌や應援歌でにぎわい和氣にあふれた新役員は左の通り。

支部長　根津菊次郎（朝日新聞論説委員）副支部長（北九州）豊田一枝（筑豊）村田定市（筒後）多久正紀

幹事―八田薫、清原俊之助、高瀨卓二、田中保雄　安藤羊藏、須田喜三男、新海泰三、石丸武穂、田中光夫、石田孝之、勝原睦夫　顧問―池田重吉

校友會富山縣支部總會

十月二十九日米田貫、安田倫藏、古城一勇の諸氏盡力に依り魚津町樂遊旅館にて校友會富山縣支部臨時總會を開催、會長を古屋東氏に、副會長を栗山基一氏に決定、懇談の氏十三名有意義に會を閉じた。

ボクシング選抜戰

去る七月十日關西學生の優秀選手を集め拳闘選拔戰が、好天下數千の觀衆裡に北野ガーデンにおいて擧行された。本學より豊田、八幡、長谷川、伊達の四君が出場、つゞいて挑戰試合に本學の橋本、福本、藤波の三君堂々相手を判定で降し、東西對抗戰の出場資格を獲得。

遠征對抗拳闘大會

吾が拳闘部は十月十六日岡山縣へ遠征、弘西小學校に於て、オール岡山代表軍と熱戰を交えた

因みに選手左の通り

フェザー級　主將　井上馨

ジュニアフライ級　橋本德藏

フライ級　豊田邦彦、福本昌三、松園寛夫

バンタム級　藤波幸保　ライト級　中川正太郎

フェザー級　栗田文吉

一高新聞發刊

本學新制第一高等學校では一學期に校友クラブの組織を整え、各部も大體その活動を開始したが、新に新聞部を結成、着々準備中であつたが九月一日創刊號を發刊した。

一高自治會發足

一高自治會は、六月十六、學園の民主化と、文化國民としての敎養を高めるべく發足、其の活動は、大いに期待される。役員左の通り、

會長　中藤菊雄、副會長　長田喜久雄、書記　土居忠雄、會計　谷川清、學生代表　森川、田、西川、敎員顧問　藤本敎諭、外に學級選出議員九名

G. H. Q. 提供翻譯許可書拔萃

I. Cultural Science:

J. Dewey: Freedom and Culture, 1936.

E. Cassirer: An Essay on Man.

L, Cole: Psychology of Adolescence, 1948.

T. H. Robinson: Mind in the Making,

R. W. Moore: Education, Today and Tomorrow

Millett: Contemporary American Authors.

L, Strachey: Eminent Victorians, 1922.

N. Foerster: Humanities and the Common Man, 1946.

E. Huntington: Mainsprings of Civilization, 1945.

L. Mumford: The Condition of Man 1944.

R. Linton (editor): Science of Man in the World Crisis.

O. K. Fraenkel: Our Civil Liberties, 1944.

H. Cantril: Gauging Public Opinions, 1944.

II. Social Science;

D. W. Brogan: A Free State, 1945.

K. B. Smellie: A History of Local Government, 1948

B. N. Cardozo: Growth of the Law.

J. M. Murray: The Free Society, 1948.

R. Benedict: Race, Science and Politics, 1947.

T. W. Schulty: Agriculture in an Unstable Economy, 1945.

H. M. Groves: Financing Goverment, 1947.

H. Truchy and M. Bye: Les Relations Economiques Internationales, 1948.

W. H. Breveridge: Full Employment in a Free Society.

S. T. Williamson and H. Harris: Trends in Collective Bargining, 1946,

N. L. Cooke and P. Murray: Organiged Labour and Production, 1946.

N. W. Chemberlain: Union Challenge to Management Contorol, 1948.

III Natural Science:

P. Frank: Einstein, His Life and Times.

G.M. Chute: Electronics in Industry.

P.G. Bergman: Introduction to the Theory of Relativity.

校友文庫について

本學は、創設以來星霜を閲すること六十有餘年、輝く歴史的傳統を保ち、本年亦新制大學として新らたなる發展を遂げ、洵に大學として其の慶びを在學生諸君は勿論、數萬の校友諸彦に頒ち得るを誇りとするものであります。

大學が其の文化活動に於いて生産するものは多角的に各方面に現われて居りますが、其の中に於て出身校友諸彦のものせられた各種著作物は亦其の逸なるものとおもわれます。

茲に本學は創設以來の校友諸彦の諸著作を蒐集し、其の業を讃へると共に大學の貴重な文化財として永く保存するの榮を擔ふべく、書庫を設け、校友文庫と名付けて、記念したいとおもひます。

之が實現に關し大方の御賛助を賜らんことを切望します。

昭和二十三年十一月

關西大學

御願

今般校友文庫を上記主旨に基いて蒐集することゝなりましたが、蒐集に當りまして大學としても諸般手を盡して努力しますが、何分古い歴史のことゝて調査洩れや蒐集洩れも澤山あることゝ存じますので、校友先輩諸彦にして御自著がありましたら御寄贈賜りたく、亦校友の著作物を御存知の方は、著者名、書名、發行年月日、發行所等出來るだけ詳しく御教示下さつて、之に關し多大の御援助賜りたく懇願します。

西大學校友會

後記

「よい娘母も惚手の數に入り」といふ古川柳がある。家の制度が廢止され、男女同權になつたことは圓滿な家庭樂しい生活を否認するものではない。學園も全く落着きを引戻し、みんな各自の本分を反省し、協力して更によき大學としやうとする熱意がすべてのことに表れるようになつて來た。

前號を送つてから今日までに起つた事柄を洩れなくお知らせするには、このさゝやかな學報では期待出來ないようになつてきた。こゝにも學園の力が溢れてゐる。學徒一萬の情熱が溢れてゐるといふような抽象的なお知らせになるのは殘念だが、學報の性格も自ら變りつゝあることに御注目願ひたい。

そこで忘れてはならないことは學園の今昔であり、それを築いた人の今昔である。といふところから本號では「學生時代の想出を語る」ことをお願してみたところ、第一回卒業の武田博士はじめ各方面に活躍中の校友諸兄から懐しい學生々活を回顧する原稿を頂いた。多少掲載を遠慮したらと思はれる程率直すぎるのもあるかもしれないが、これも過去の學生記錄の一つとして御披露することにした。これらの想ひ出をまとめる意味で明治三七卒村尾靜明氏を圍み校友學生を交へ昔の學生々活を語つて頂いた。

その懐しい學生々活の想ひ出の一つである「大學祭の今昔」を語るため第一回大學祭の當時青年專務理事であつた現宮島理事長も出席し、また戰後大學祭の復活に努力した西田、上野兩君と本年の井元、大平君等も參加していろいろな點から過去や理想を語り合つてもらつた。

特別講演の記事は本號に抄錄することができないのでこれは大急ぎでまとめて別冊として送りたい計畫を建てゝゐる。

× × ×

次號にわ「學生生活考現學（モダノロヂー）」特集として特に現代學生生活をあらゆる角度より觀察し其のモルフォロギーを把握してみたいとおもつて居る。と云つて、教育學的に、青年心理學的に、經濟學的に、政治學的に或わ職業社會學的にと云ふように所謂「科學的」な批判研究と云ふ鹿角らしいものでわなく唯、學生諸君自らのありの儘を聽いて學生生活體驗のレポートを得たいとおもふだけである。けれども私らに反省と研究との大な資料を提供してくれると期待する。これが爲學生諸君わ勿論關係諸彦の御協力と御援助とを切望する。

大正十一年七月十五日創刊
昭和二十三年十二月廿四日印刷
昭和二十三年十二月廿八日發行
大阪市大淀區長柄中通二丁目十三番地
關西大學
編集兼發行人 春原源太郎
不許複製
印刷所 ナニワ印刷所
大阪市北區川崎町七
大阪市大淀區長柄中通二丁目十二番地
發行所 關西大學出版部
責任者 羽野堅二
（出協會員B一一一〇〇二）
關西大學
千里山學舎 大阪市外千里山
電話吹田一二三・四六一
天六學舎 大阪市大淀區長柄中通
電話堀川㉟一七六五

時計
ライター
眼鏡
萬年筆
貴金屬
販賣並に修理
（市價二割引大勉强）
關西大學厚生部時計店
高島屋時計修理部專屬
稻上時計店出張

日本橋一丁目交叉點
鎌田特許事務所
辨理士 鎌田嘉之

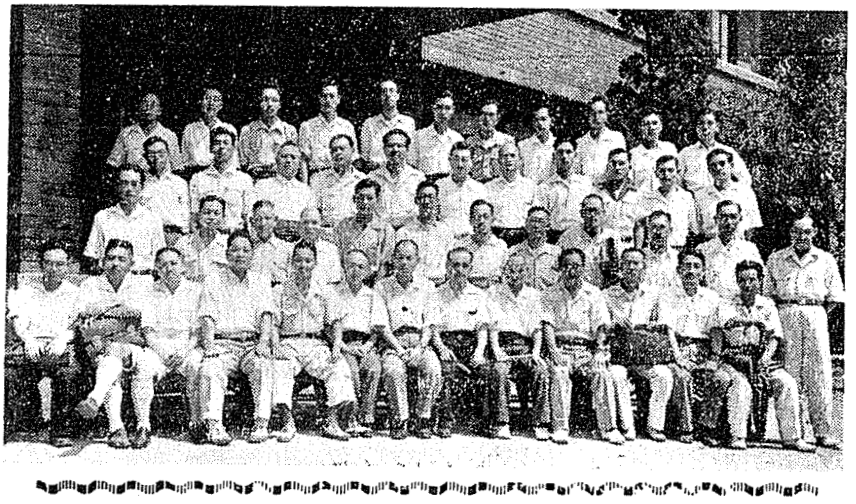
洋服の
ニューモード
紳士服、學生服、婦人服
小供服、修理更生
染色、クリーニング
洋品雜貨、學帽
技術本位
迅速丁寧
關西大學指定
千里山學園內厚生會館
K.K. 司屋

喫茶店
ダイヤモンド
天六京阪ビル五階
午前九時—午後五時

母校擴充發展を圖る
同門同職の研究親睦團體

關大近畿計理士會

（事務所）
大阪市北區鳴尾町一〇
長柄金吾方
（堀川一三九八番）



顧問　森川太郎（關大教授・圖書館長）
顧問　安井章吾（關大秘書課長）
顧問　藤原龍太（計理士會大阪支部長・東區北濱三丁目一〇・北濱番八五）
會長　鵜飼金次郎（北區菅原町七九）
副會長　長柄金吾（北區鳴尾町一〇・堀川一三九八番）
副會長　廣實郁雄（布施市荒川二丁目六〇・布施二八四）
幹事　白井種雄（北區大工町一九・堀川三五八六番）
幹事　藤井藤三郎（東區北久寶寺町四ノ一九）
幹事　森田森（岸和田市野田町一〇九・岸和田六六〇番）
幹事　鈴木庄太郎（南區長堀橋筋一丁目二九）
幹事　松下忠由（北區梅ヶ枝町一八八）
幹事　逢坂勝見
幹事　上西榮萬（阿倍野區天王寺町二五八四）